

日本語研究者はいつ優れた論文を書くか

—— 年齢による論文生産の変化 ——

荻野 綱 男

1. はじめに

荻野は、特に日本語研究の分野において「研究の研究」に興味を持っている。どのようにして研究が行なわれ、論文が書かれていくのだろうか。日本語研究の分野でこのようなことを調べるのは、日本語研究のありかたを考える上でも必要なことであるし、論文を書くという「言語行動」の研究であるから社会言語学の一部であるし、また、科学社会学としての意味もある。

荻野 [1] は、日本語研究に関する雑誌論文について、年齢別の執筆件数を調べ、40代半ばでピークになること、すなわち、量的に見て研究活動は40代半ばが中心であることを明らかにした。また、荻野 [2, 3] は、そのような年齢別の論文生産性に男女差があることを明らかにした。

これらの研究は、あくまで論文の量的側面からの調査であり、論文の質についてはまったく無視している。研究の量的ピークが40代であるということは、40代で最も研究がはかどるということであるが、質的に見ても、優れた研究は40代で行なわれるものだろうか。画期的なアイデアはもっと若い時期に産み出されるものだという説もある一方では、研究の蓄積によってさらにいい研究ができるのであるから、もっと高齢になってからいい論文が書けるのだという説もある。

そこで、質的な観点から見て、日本語研究者は何歳のときに優れた論文を書くのかを明らかにしようと考えた。

難問は、「質的観点」である。それぞれの論文の質を評価することは、いうまでもなく、きわめてむずかしい。論文の評価にはさまざまな側面があり、公平・客観的な評価基準はないに等しい。そこで、自己評価、すなわちその論文を書いた著者本人の評価を採用することにした。自分の研究の質について自分で判断する限りは統一的な評価ができるのではないかと考えた。それぞれの人

が自己評価を行ない、それを多数の人について集めれば、少なくとも年齢による変化については見ていくことができるはずである。

2. 調査の概要

2-1 予備調査

日本語研究者の主だった方々は国語学会会員であろうと考えて、本調査は、国語学会会員に対するアンケートにすることを決めていたので、予備調査としては、国語学会の会員でない人を対象にしなければならない。そこで、類似の学会として、日本言語学会を選び、1993年7月に、荻野の知人の範囲で、日本言語学会の会員で、国語学会の会員でない人を選び、30人ほどの人に手紙を出して、予備調査を行なった。10人から返事があり、その結果によって、本調査用に項目を追加したり、アンケート用紙の文面などを変更したりといった改訂を加えた。

2-2 本調査

1993年12月に、国語学会の会員を対象にした郵送法によるアンケート調査を行なった。

国語学会の機関誌「国語学」174集（1993. 9 発行）掲載の国語学会会員名簿によれば、日本国内在住の国語学会会員は2,145人である。この中からサンプリングして、2回に分けてアンケート用紙を発送した。

まず、国語学会会員全員について、フロッピー版文献目録[4]に名前が載っているかどうか、荻野が収集した個人データベース（主資料は国語年鑑30年分、それに若干の人名録などの書誌などから情報を収集した）に名前が載っているかどうかを照合した。その結果、表1のような結果になった。

表1 国語学会会員と他資料の照合結果

FLOPPY版 文献目録	個人データベース		合計	
	あり	なし		
なし	② 59	1024	1083	
あり	① 737	324	1061	
合計	796	③ 1348	2144	※この表では、荻野を除外して集計しているの で、合計人数は 2144 人になっている。

第1次調査として、表1の①とあるところ、すなわち、二つのデータベースに名前が載っている人737人を選定した。いわば、古参者・古老・大家・有力者・著名人・中心的研究者である。

第2次調査としては、比較的若手の研究者を選ぶ必要があると考えた。第1次調査でやや高齢者に偏ったからである。結果的に、二つのグループを選んだ。一つは、表1の②とあるところで、最近の国語年鑑に名前が載っているが、フロッピー版には名前がないということで、典型的若手研究者と考えられる。これが59人である。もう一つのグループは、表1の③とあるところ、すなわち国語年鑑に名前が載っていない国語学会の会員の中から、国語学会の名簿で職業が「大学助教授・大学(専任)講師・研究所員・大学非常勤講師・大学助手」となっている人を選んだ。学会名簿で大学名だけ書いている人も含めた。人数は406人である。この人達は、若い人というだけでなく、他分野の人、論文をあまり書かない人など、いわば周辺的研究者が含まれている。合計465人が第2次調査の対象者である。

2回の調査の合計で1,202人が調査対象者になった。

3. 回答者の属性

第1次調査の回収数(回収率)は、232人(31.5%)、第2次調査は、143人(30.8%)である。合計で375人(31.25%)である。回収率が低いと、アンケートの結果が母集団を反映するとは言えなくなる。30%強という数値は、郵便調査ではまずまずの回収率であろう。若干の留保は必要であるが、一応代表性があると考えられる回収率である。

国語学会会員数、調査対象人数、回答者、回収率を県別に集計すると、表2のようになる。

国語学会会員の分布は、大学の分布と重なっており、大都市などに集中していることが読み取れる。なお、回収率では、大都市を含む地域のほうが若干下がる傾向があるようだ。第1次調査では、東京都在住の人がかなり多くなっており、極端にいうと、中心的研究者は東京都に住むことが多いといえよう。

回答者の男女別では、表3のような結果になった。

年齢別に集計すると、表4のような結果になった。第1次調査と第2次調査の年齢分布の違いがはっきりしている。

以上のような属性の間の関連を見ておこう。図1は、年齢層ごとに男女比を

表2 国語学会会員の県別分布と回収率

県名	国語学会 会員数	調査対 象人数	回収 数	回収率	第1次 調査	第2次 調査
北海道	35	22	6	27.27	3	3
青森県	14	8	5	62.50	4	1
岩手県	8	6	4	66.67	0	4
宮城県	39	19	6	31.58	3	3
秋田県	6	3	1	33.33	1	0
山形県	11	8	2	25.00	0	2
福島県	14	9	4	44.44	2	2
茨城県	63	28	6	21.43	2	4
栃木県	19	10	4	40.00	2	2
群馬県	13	6	1	16.67	1	0
埼玉県	99	59	18	30.51	12	6
千葉県	81	46	15	32.61	11	4
東京都	494	280	75	26.79	55	20
神奈川県	145	78	19	24.36	11	8
新潟県	31	15	9	60.00	5	4
富山県	14	6	3	50.00	1	2
石川県	24	14	5	35.71	4	1
福井県	18	5	1	20.00	1	0
山梨県	12	5	3	60.00	2	1
長野県	26	14	6	42.86	4	2
岐阜県	13	5	2	40.00	0	2
静岡県	35	17	7	41.18	6	1
愛知県	102	59	12	20.34	8	4
三重県	25	15	9	60.00	4	5
滋賀県	22	14	2	14.29	1	1
京都府	97	57	13	22.81	12	1
大阪府	147	73	23	31.51	10	13
兵庫県	130	66	28	42.42	17	11
奈良県	51	31	8	25.81	6	2
和歌山県	11	5	1	20.00	0	1
鳥取県	4	2	0	0.00	0	0
島根県	10	6	4	66.67	3	1
岡山県	39	22	9	40.91	6	3
広島県	73	50	14	28.00	10	4
山口県	16	15	10	66.67	5	5
徳島県	11	9	2	22.22	1	1
香川県	11	6	3	50.00	1	2
愛媛県	17	12	4	33.33	1	3
高知県	10	6	4	66.67	3	1
福岡県	69	40	10	25.00	5	5
佐賀県	8	4	0	0.00	0	0
長崎県	11	7	3	42.86	1	2
熊本県	25	13	4	30.77	2	2
大分県	10	7	2	28.57	0	2
宮崎県	5	2	0	0.00	0	0
鹿児島県	19	11	6	54.55	4	2
沖縄県	8	7	2	28.57	2	0
合計	2145	1202	375	31.20	232	143

表3 回答者の性別

	第1次調査	第2次調査	合計
男性	210	94	304
女性	21	48	69
不明	1	1	2
合計	232	143	375

表4 回答者の年齢分布

年齢	1次	2次	合計	年齢	1次	2次	合計	年齢	1次	2次	合計
26	0	1	1	47	8	2	10	68	8	0	8
27	0	6	6	48	4	2	6	69	1	0	1
28	0	3	3	49	4	1	5	70	2	0	2
29	0	4	4	50	6	0	6	71	3	0	3
30	0	9	9	51	3	1	4	72	4	0	4
31	0	6	6	52	1	1	2	73	3	0	3
32	1	12	13	53	2	3	5	74	4	0	4
33	2	10	12	54	7	1	8	75	1	0	1
34	0	10	10	55	6	1	7	76	1	0	1
35	8	12	20	56	9	0	9	77	3	0	3
36	5	5	10	57	3	0	3	78	2	0	2
37	3	9	12	58	9	0	9	80	1	0	1
38	8	8	16	59	5	1	6	81	1	0	1
39	6	5	11	60	6	0	6	82	4	0	4
40	4	4	8	61	8	1	9	83	1	1	2
41	4	4	8	62	5	1	6	84	1	0	1
42	4	4	8	63	10	0	10	86	1	0	1
43	5	3	8	64	5	1	6	87	1	0	1
44	9	2	11	65	6	1	7	不明	0	1	1
45	5	5	10	66	9	0	9				
46	3	2	5	67	7	0	7	合計	232	143	375

見たものであるが、若い層で女性の比率が高くなっている。

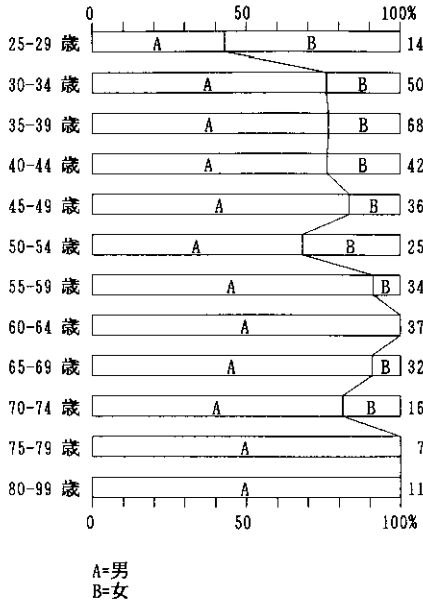


図1 年齢層ごとに見た回答者の性別

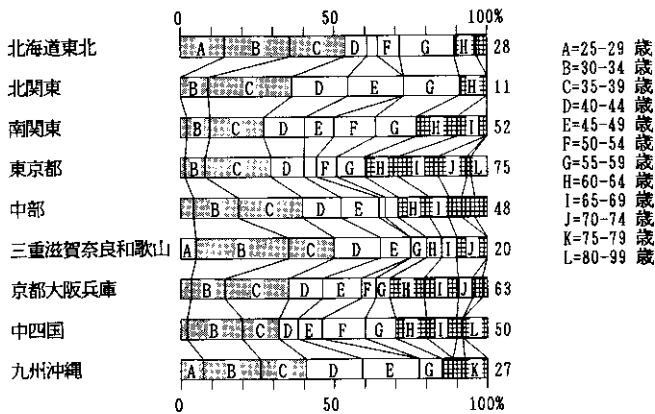


図2 現住所ごとに見た回答者の年齢層

図2は、現住所をいくつかの県単位にグルーピングして、年齢層との関連を見たものである。東京に高年齢層が多いことが目立つ。また、大都市圏から離れるほど若い人の比率が高くなる。若い内に地方に住んで、年をとってくると大都市に住む傾向があるようだ。

あなたの現在の専門分野は何でしょうか。次のリストの中から最も近いと思うもの二個以内を選んで下さい。(注：選択肢のリストは省略。図3を参照のこと。アンケートの質問文はこのように野線で囲って示す。以下の項目でも同様。)

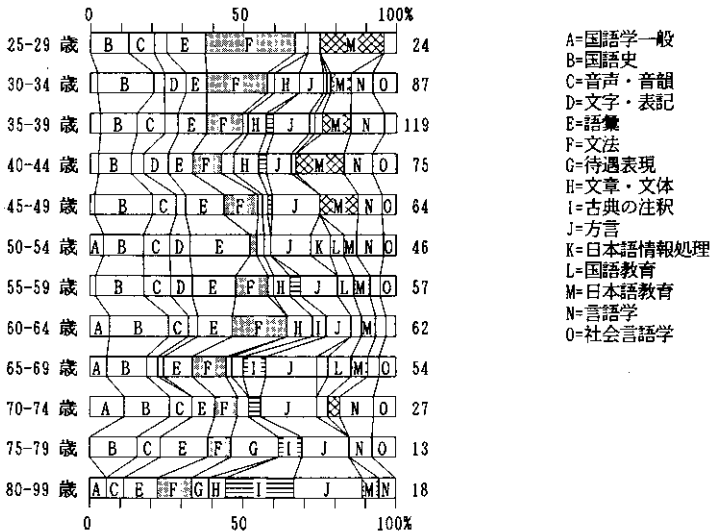


図3 年齢層ごとに見た回答者の専門分野

国語学会の会員の専門分野の分類には悩んだ。アンケート調査する前に、分類しなければならないのだが、分類はどうやってもぴったりしたものにならない。そこで、とりあえず、フロッピー版文献目録（つまりは国語年鑑）の分類を用い、それにごく一部付け加えて分類を決めた。

専門分野を二つ回答した人の場合は、それぞれの分野に属するものとして集

計した。

図3は、回答者の専門分野を年齢別に集計したものである。これによると、分野によって大きな年齢差があることがわかる。若い人で増えている分野というと、F「文法」やM「日本語教育」である。特に文法分野の伸びが著しい。最近の文法関係の刊行図書の増加も肯けるというものである。若い人で減っている分野というと、I「古典の注釈」がある。J「方言」もややその傾向が伺われる。

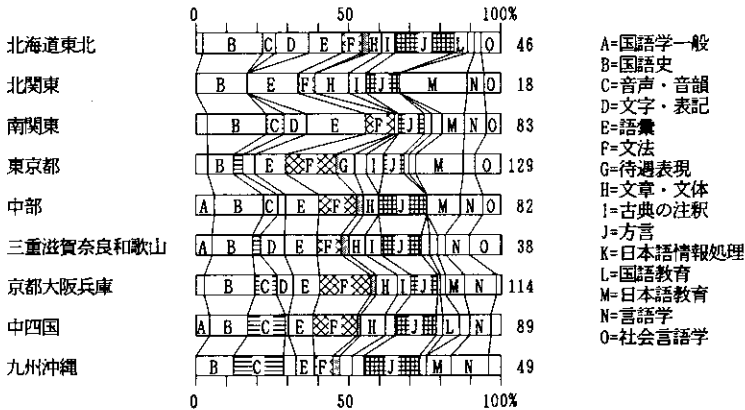


図4 現住所ごとに見た回答者の専門分野

図4は、専門分野を現住所別に集計したものである。C「音声・音韻」は中四国から九州沖縄にかけて多くなっている。F「文法」は西日本でやや多い。G「待遇表現」は東京でやや見られるが、北日本ではごくわずかしか見られない。J「方言」は東京都や京阪などの大都市圏で少ない。研究していても国語学会に入っていない人がいるし、アンケートに回答しなかった人がいるから、図4が研究の盛んな（盛んでない）地域を直接あらわしているわけではないにせよ、ある程度の傾向は伺えるように思う。

図5は、専門分野を男女別に見たものであるが、日本語教育にとび抜けて女性が多いことがはっきりしている。

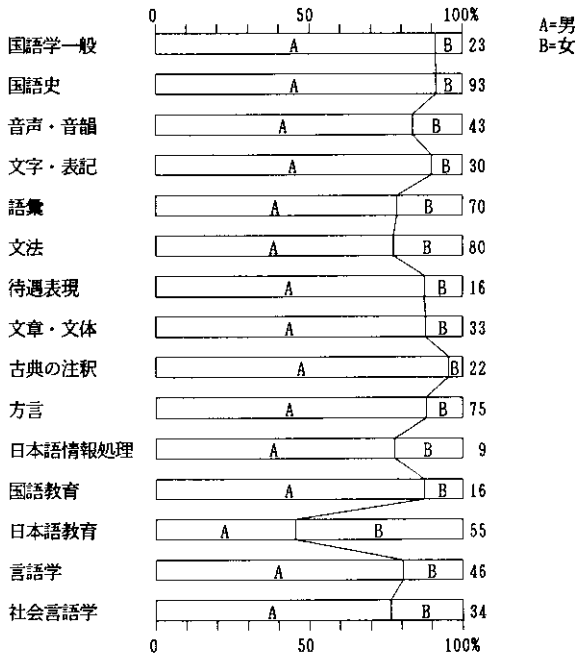


図5 専門分野ごとに見た回答者の性別

4. 優れた研究をする時期

4-1 代表的論文を書く時期

次のページの質問で記入された刊行年と現在の年齢を基に、論文執筆時の年齢を算出し、集計した。代表的論文の執筆年齢を年齢層別にまとめた結果が図6である。

各年齢層とも、現在の年齢よりも前のものをまんべんなく挙げており、特にどの年齢のものが多いいということはない。すなわち、代表的な、優れた論文を書く年齢に集中や偏りはないということである。高年齢になるにつれて代表的論文執筆年齢がばらつくということは、いつも同じようなレベルの研究をしていることの現れだとも解釈できよう。

以前の荻野の研究で、量的に見ると、論文執筆量は40代の中頃にピークを迎えるということがわかっているが、自己評価という「質」で判断する限りでは、

あなたが今までに書いた日本語研究関係の論文（著書）のうち、現在の時点で、自分で自信があるもの、優れていると思うもの、質が高いと評価するものから順に1本から3本の範囲で選び、それぞれについて、以下の欄の刊行年と種類と論文を執筆した言語（日本語で書いたか、外国語で書いたか）を書いて下さい。

共著のものを含めてもかまいませんが、その場合は、あなたが中心になって書いたものを想定して下さい。

自分の全部の論文に自信がなく、すべて書き直したいものばかりだという場合もあるかもしれませんが、そういう場合は、あなたの代表的な論文を考えて下さい。たとえば、あなたが他人に自分の研究の紹介をするときに挙げるもの、『国語年鑑』の末尾の「国語関係者名簿」に挙げるもの、シンポジウムのスピーカーになって、司会者からあなたの紹介のために代表的論文を知らせてほしいといわれた場合などを想定して下さい。

書き直したものの刊行年（たとえば一度書いたものを手直しして単行本に収録したような場合は、最初の公表時の刊行年を書いてください。

論文の種類は、右の選択肢から選んで数字を欄内に記入してください。

刊行年 種類 論文を執筆した言語

		1)日本語 2)外国語
		1)日本語 2)外国語
		1)日本語 2)外国語

【論文の種類を選択肢】

- 01) 「国語学」に執筆した論文
- 02) 他の国内の学会誌に執筆した論文
- 03) 国際的な雑誌に執筆した論文
- 04) 商業雑誌に執筆した論文
- 05) 大学などの紀要に執筆した論文
- 06) 記念論文集に執筆した論文
- 07) 講座ものに執筆した論文
- 08) 国内学会での口頭発表
- 09) 国際学会（国際会議）での口頭発表
- 10) 科学研究費の報告書
- 11) 著書（単行本）
- 12) 博士論文
- 13) 修士論文
- 14) 卒業論文
- 15) その他

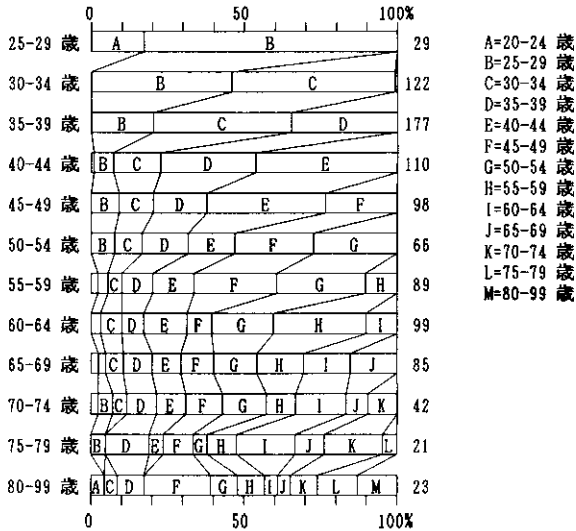


図6 代表的論文を書いた年齢（年齢層別）

そのようなある年齢層に集中する，つまり優れた論文を書く時期があるということはいえないということである。

図6をよく見ると，年齢層による違いが見えてくる。40-44歳以下の年齢層では，それぞれの帯グラフの右端の幅が最大であり，代表的論文を書く年齢が現在の年齢と同じだという回答が多い。しかし，45歳から64歳まででは，現在の年齢よりも一段階下の年齢層を代表的論文執筆年齢として挙げる人が多くなる。グラフでいうと，右から2番目が最大の幅になる。65歳以降は，どの年齢層が多く回答されたということはない。以上のことから，若い人は，最近書いた論文を代表的論文と考えており，40代から60代にかけては数年前に書いたものを代表的論文と考える人が増えてきて，60代後半くらいからはそのような集中がなくなってくるといえる。

このデータを専門分野別に見たのが図7である。

図7によれば，「古典の注釈」や「国語教育」などでは，代表的論文を書くのがやや遅くなる傾向が見られる。しかし，これらの分野では，図3で見たように，回答者が高年齢層に偏っていることに注意するべきである。（「国語教育」では若干見えにくい。）それを考慮して図7を見るならば，専門分野の違いはかなり小さいといっている。

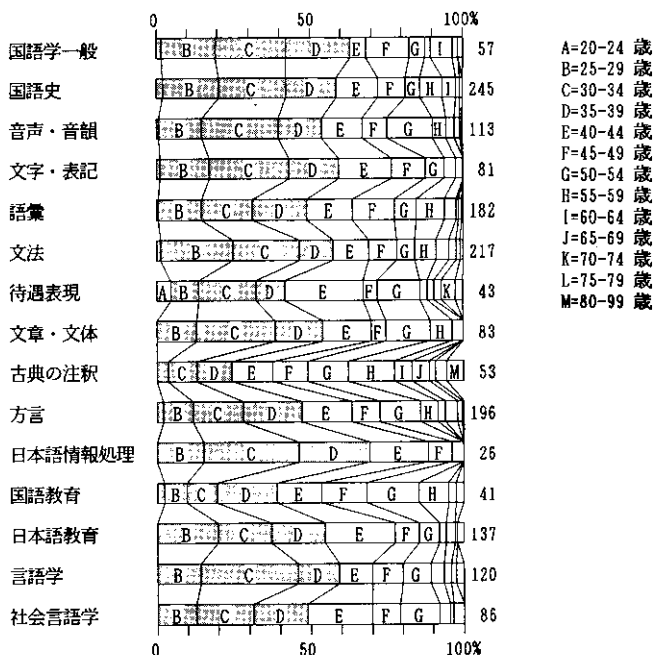


図7 代表的論文を書いた年齢（専門分野別）

代表的論文の種類を年齢別に集計したのが図8である。

若い人は、E「大学紀要論文」を代表作と考えることが多いのに対し、高年齢になるとK「著書」が増える。最高年齢層80-99歳では、L「博士論文」である。F「記念論文集論文」やG「講座もの論文」はE「大学紀要論文」とK「著書」の中間的な位置を占め、年齢別に見ると、E→F→G→K→Lのような流れがあるようである。このような「代表的論文」の種類を見ていると、これは執筆チャンスそのものとかかなり相関が高いといえそうである。

ただし、このような図を見ていくのに注意を要する点がある。著書や博士論文のように、比較的高年齢になってから書くものは、それまでの個別の論文をまとめたケースがかなりある。すなわち、著書の刊行年代以前に基本的アイデアがすでに発表されているともいえる。（アンケートの指示では、書き直したものについては最初の公表時の年代を記入するように指示したが、著書にまと

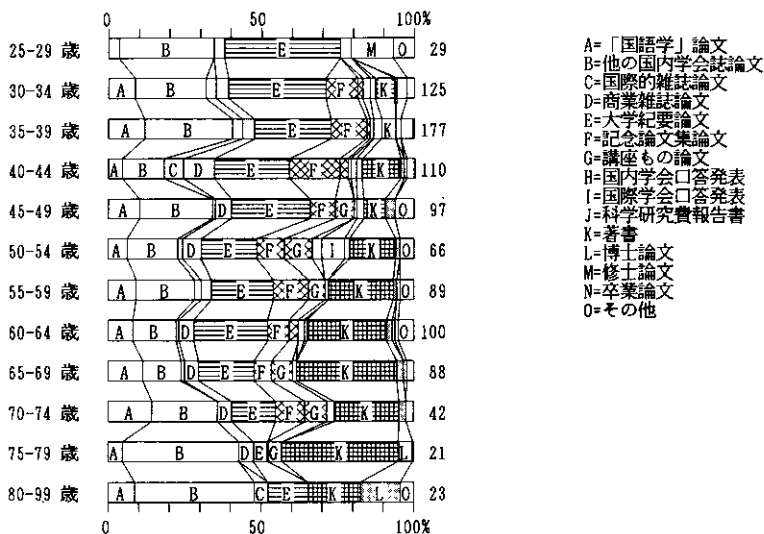


図8 代表的論文の種類 (年齢層別)

めるような場合、どちらを「代表作」と考えるか、不明である。) この傾向がどれくらい強いのか、アンケートの項目にはなかったので、何ともいえないが、これを考慮すると、図8よりは、若いときに代表的論文が書かれるということになる。

余談だが、代表的論文を書いた言語を専門分野別に集計すると、図9のようになる。

ほとんどが日本語であり、日本語研究分野では、優れた論文は日本語で書かれるとあってよさそうである。ただし、「言語学」と「日本語情報処理」では、「外国語」という回答もかなりある。

4-2 研究が進む時期

日本語研究者は、自分自身の過去数年間の研究の変化をどのようにとらえているのだろうか。また、今後の研究の進展について、どのような予測を持っているのだろうか。この結果を年齢別に集計することによって、研究が進む時期が推定できる可能性がある。

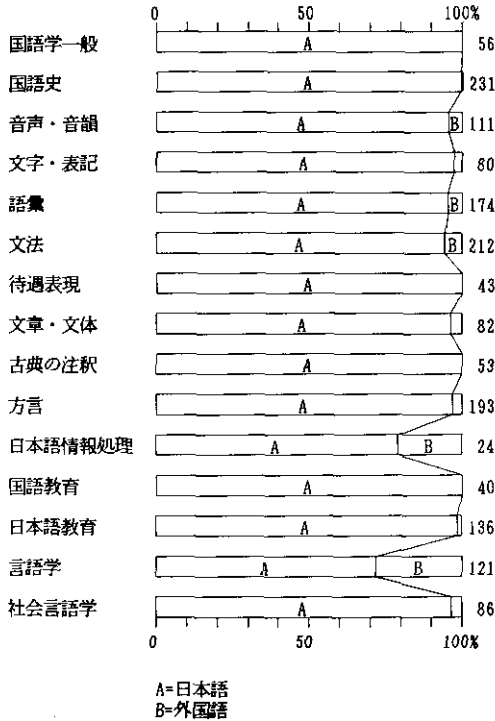


図9 代表的論文の執筆言語（専門分野別）

あなたは、上に挙げた論文を越える論文を今後書く可能性がありますか。

年齢層別に集計した結果が図10である。若い人にA「越えるものを絶対書く」が多く、60代から70代になってくると、可能性がないと考える人が多くなっていくのは当然である。しかしながら、高年齢層でもA「越えるものを絶対書く」やB「おおいに可能性がある」という回答がかなりあることに気をつけなければならない。図6で見たように、代表的論文は、いつでも(何歳のときにでも)書く(書ける)のであって、それを延長して今後を予測するならば、高齢になったからというだけでいい論文が書けないだろうと考える必要はない。ある意味では、年齢が高くなるともっとよい論文を書く自信のある人とない人の二極分解する傾向がある。

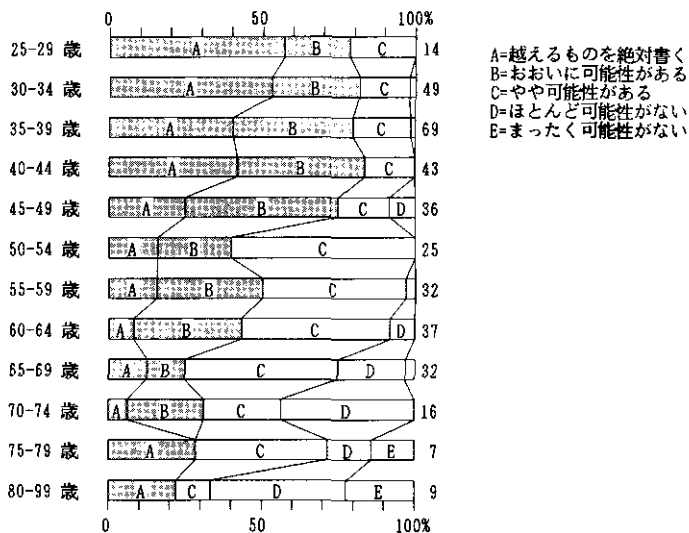


図10 もっとよい論文を書く可能性 (年齢層別)

あなたは、今後数年先を想定した場合、研究がどんどん進む（論文を次々に書く）ようになると予想しますか、いろいろな事情で思うように進まなくなると予想しますか。

図11に、年齢層別の結果を示した。50代前半まではA「進む」という回答が多く、まだまだこれからだという意識を持っているようだ。しかし、50代後半からはB「進まない」という回答が多くなってくる。50代半ばあたりがひとつの峠であろうか。

図12は、専門分野別の集計であるが、「国語教育」などはB「進まない」という回答が多いが、「社会言語学・言語学」などはA「進む」が多く、これらの分野には、さらに大きな進展があるように意識されている。

あなたは、5年前と比べて研究がどんどん進むようになりましたか、いろいろな事情で思うように進まなくなりましたか。

図13は、年齢層別の回答である。A「進むようになった」という回答は、若

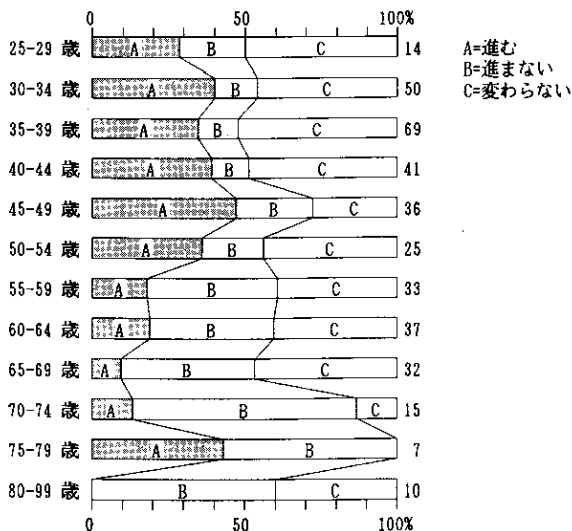


図11 今後の研究の進展の予想 (年齢層別)

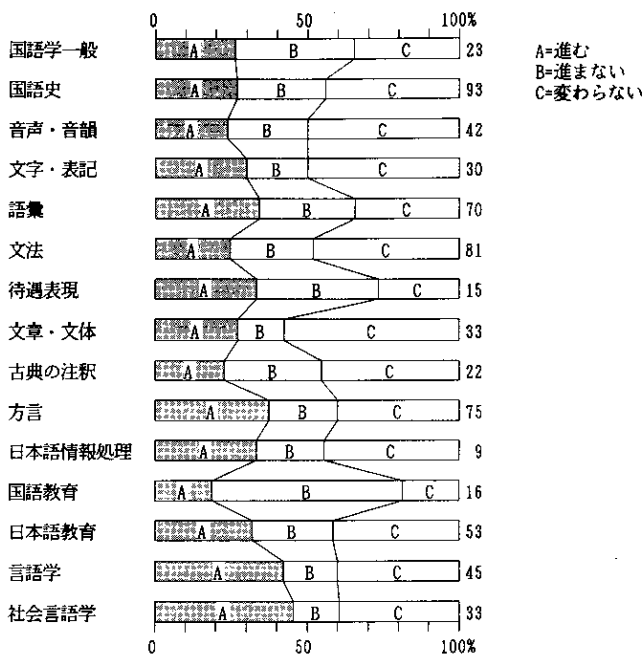


図12 今後の研究の進展の予想 (専門分野別)

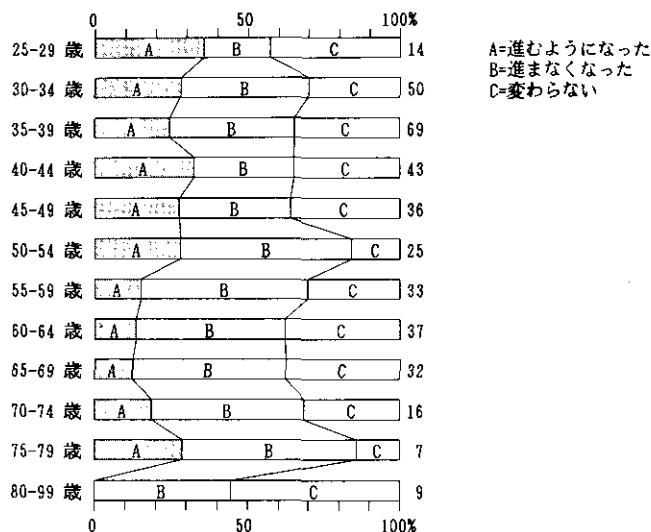


図13 最近5年間の研究の進展 (年齢層別)

い人に多く、50代以降になるとかなり減ってくる。しかしながら、この図によれば、どの年齢層にも「進む」という回答も「進まない」という回答もあるので、特に研究の進むピークの年齢層があるのではないということになる。

図14は、専門分野別の集計結果である。「古典の注釈・国語教育」あたりは「進む」という回答が少なく、「日本語情報処理」は多い。すでに多大の研究が蓄積されている分野と、新たに起こってきた研究の違いを反映していると解釈できる。

どのような事情で進むように (進まなく) になりましたか。以下の欄に自由に記入してください。

自由記入の結果をおおまかに分類してみた。年齢差などもあるが、回答がさまざまに多岐にわたるため、ここでは単純集計の結果だけを示す。自由記入の回答の分類は、しばしばむずかしい。回答者個々人の違いを反映しており、回答にいろいろと重なっている部分があったり、同じ現象を別のことばで表現したりするからである。特に、「進まなくなった理由」のほうは、「家庭の事情」とか「時間がない」などの回答でなく、その先のもう一段階深い理由 (どんな事

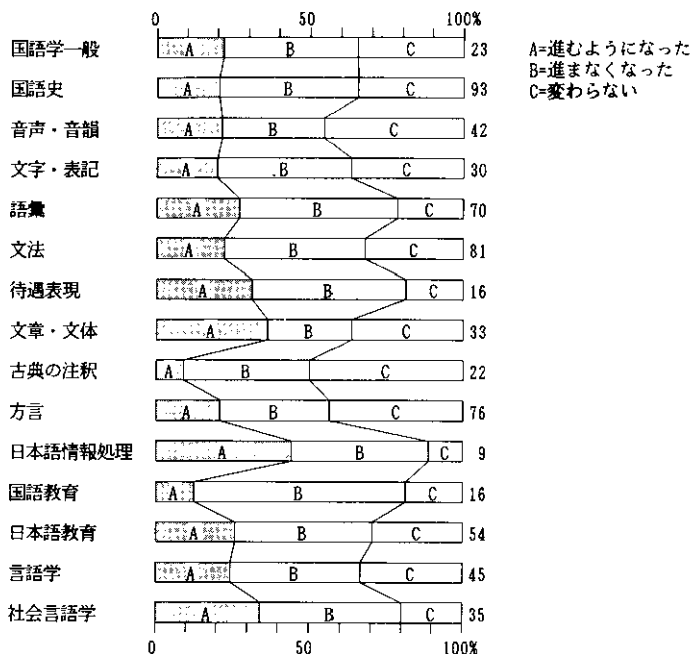


図14 最近5年間の研究の進展(専門分野別)

情なのか、なぜ時間がないのか)を知りたいのだが、それが書かれていない以上、どうすることもできない。したがって、ここでは、だいたいの傾向を見ることにとどめるべきであろう。

それぞれの後ろに書いてある数字は、そのような回答を寄せた回答者の人数である。

—— 進むようになった理由 ——

就職したから(以前は学生)=9, 明確な課題が見つかった=8, 転職(研究職へ)=7, 図書や資料が手に入りやすくなった=7, 環境が良くなった(研究室ができた・学会や研究会に出かけやすいなど)=7, 自分の能力が向上した=6, 関心の対象分野が広がった=6, 子供が成長したため=6, 研究時間がとれるようになった=6, 仲間に刺激されて(研究会に参加したり)=5, 専任教員になって研究の場が保証されるようになった=5, ワープロ(コンピュータ)が使えるようになった=5, 研究費の確保=4, 雑用・大学の仕事が多くなった=4, 共同研究をするようになった=4, 今までの研究成果があ

らわれてきた(進展してきた) = 4, 自己の研究土台が固まってきた = 4, 自然とそういう状況に追い込まれた(環境により) = 3, 勤務地が変わり, 時間的余裕ができた = 3, 研究に深みが増してきた = 3, 研究に没頭(専念)できるようになった = 3, 私的生活環境が良くなった(含む結婚) = 3, 意識(やる気)の向上 = 2, そういう時期に達した(年齢的にも) = 2, 退職して自由になった = 2, 健康になってきた = 2, 他分野の仕事(勉強)が必要となり, 専門分野に刺激となった = 1, 自分の研究に対する自信ができた = 1, 短大から四年制大学へ移った = 1, 関係分野の研究が進んできた = 1

— 進まなくなった理由 —

雑務に追われるため(公務・校務) = 55, 教育活動(授業負担増加) = 29, 会議・委員会活動 = 20, 大学運営・管理のため = 18, 体力の衰え = 17, 気力・研究意欲の低下 = 17, 他の活動が増えた = 16, 家事育児の負担増加 = 15, 高齢のため = 14, 病気のため = 11, 学会の活動 = 7, 時間の確保困難 = 6, 就職したため(以前は学生) = 6, ひとつのテーマに取り組んでいるため = 5, 研究費の確保困難 = 4, 研究の難しさがわかってきた = 4, 勤務環境が悪くなった = 4, 研究分野の広げ過ぎ = 4, 家庭の事情 = 4, 共同研究のため, 自分独自のテーマに集中する時間がなくなった = 3, 結婚したため = 3, 資料の乏しい環境にいる = 3, 転職(行政へ) = 2, 方法論上の迷い = 2, 教育と研究分野の不一致 = 2, 遠距離通勤 = 2, 関係分野の研究が進み, 追い付くのが大変になった = 2, 退職したため = 2, 思考力の低下 = 2, 怠け心 = 1, 問題点やテーマが見つからない = 1, 自分の適性が研究者ではないと悟った = 1, 年齢とともに稚拙な研究が恥ずかしくなった = 1, 慎重になってきた = 1, 研究会への参加機会が減り, 刺激が減った = 1, スランプ = 1, 若い時の基礎研究の積み重ね不足 = 1, 資料の焼失 = 1

「進むようになった理由」は, 環境の変化を挙げる人が多い。研究環境の重要性がうかがえる。

「進まなくなった理由」のほうが深刻であるが, 上位4位までは, 大学などで研究以外の負担が大きいこととして共通の枠組でとらえられることであろう。自分の時間をどう割く(時間が割かれてしまう)かという問題である。その次に, 体力・気力・意欲の低下がくる。「高齢のため」などもかなり少ない。研究が進まなくなるのが, 体力の低下なども含めて年齢的な理由でないという

ところが重要であろう。研究には、年齢的なピークがあるわけではないと意識されていることは、ここでも明らかである。

研究が進まない理由が、研究以外の負担にあるということは、このあたりが改善できれば、研究はさらに進むということである。

あなたが研究活動に力をそそいでいた期間はいつごろですか。下の目盛り
りに←→でマークしてください。

10歳 20歳 30歳 40歳 50歳 60歳 70歳 80歳 90歳



数直線上に研究期間の始めと終わりを矢印で記入してもらったところ、終わりはない（現在も研究は進行中、今の年齢まで矢印をのぼす）という回答が非常に多かった。すなわち、研究活動はいつまでも続くといえるようだ。

研究を始める年齢は、図15に年齢層別の回答を示した。全体として、20代くらいから研究を始めた人と意識している人が多い。

この項目は、自分の現在の年齢よりも前の年齢を回答する項目であるから、

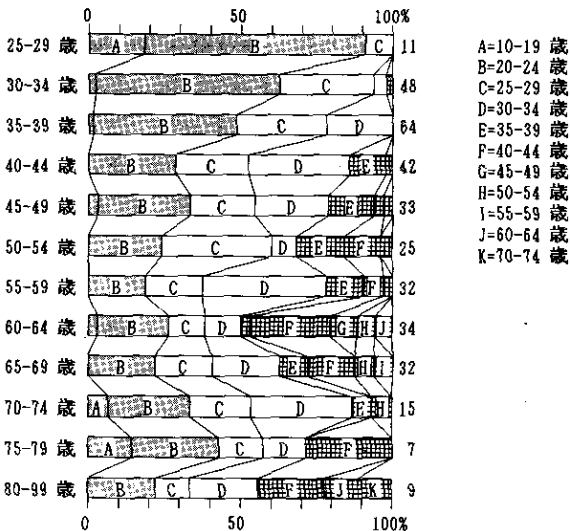


図15 研究活動を始めた時期 (年齢層別)

年齢差がはっきり見えるのは当然である。しかし、それ以上に、他の年齢層と大きく異なる傾向が読み取れるところがある。60-64歳では、F「40-44歳」を挙げる人が多い。55-59歳では、D「30-34歳」を挙げる人が多い。50-54歳では、C「25-29歳」を挙げる人が多い。20年から25年前ということになる。逆算すると、大学紛争直後ということになる。大学紛争が終わってから、研究に力をそぐことができるようになったということだろう。

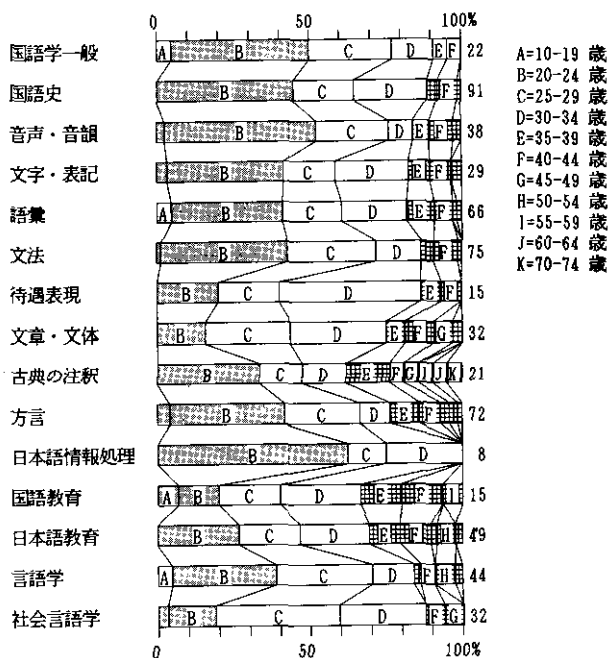


図16 研究活動を始めた時期（専門分野別）

図16は、同じく専門分野別の集計である。研究活動を開始する年齢が比較的早い分野としては、「日本語情報処理」があるが、これは明らかに新しい分野の特徴といえるだろう。ただし、回答者の人数が少ないことに注意するべきである。それ以外では、「国語学一般」から「文法」までの伝統的国語学の中心分野と「言語学」がある。「方言」と「社会言語学」も同様の傾向を示している。

一方、研究活動開始年齢が比較的遅い分野としては、「古典の注釈・国語教育・日本語教育」が挙げられる。アンケートの質問の文面から考えると、他の分野の研究をしていた人がこの分野に移ってきたということではなく、この分野で論文を書く人は書き始めるのがやや年を取ってからだということである。

このように、研究活動の時期は、分野ごとに異なる傾向を見せており、年齢による論文生産の変化を考えると、分野の影響を考慮する必要があることを示唆している。

4-3 研究の量と質の問題

書いてきた論文の質と量は相関するのだろうか。それを見るために、次のような二つの質問をした。

あなたが今までに書いてきた論文の「質」を全般的に見た場合、高いと思いますか、さほどでもないと思いますか。

あなたが書いてきた論文の「量」について、どう思いますか。

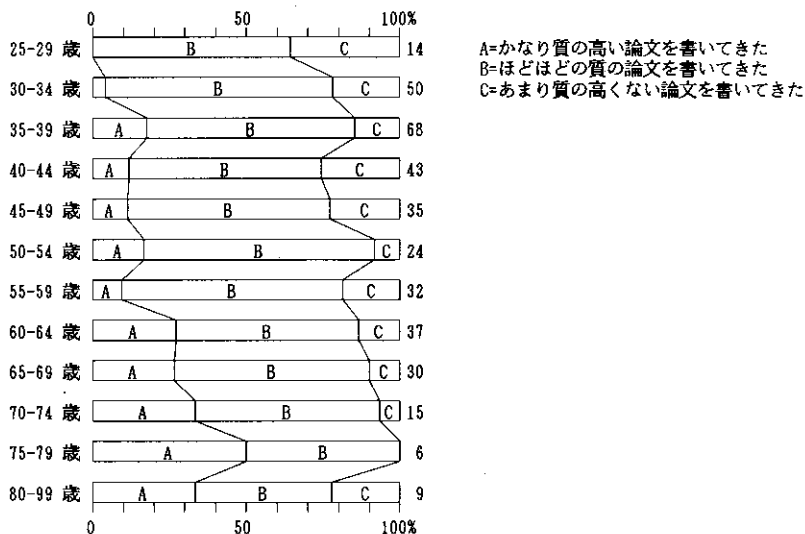


図17 論文の質の自己評価（年齢層別）

図17に第1の質問の年齢層別の結果を示した。若い人にC「あまり質の高くない論文を書いてきた」が多く、年齢が高くなるほどA「かなり質の高い論文を書いてきた」が多いという結果になっている。

このような質問では、回答者は自分の一生を回想して回答するというようなことはしないし、できない。思い付くのは最近10年とか、20年とかであろう。そのような近過去のことを考えれば、(後述の図25からも容易にわかることであるが)全体として質が次第に上がる傾向があるから、高年齢層のほうが自己評価が高くなるのであろう。

第2の質問の場合、適当な判断基準を示さずに、このように質問されると、回答者はかなり困るはずである。おそらく、だいたい同じ分野の同じくらいの年齢の人達を思い浮かべ、自分の論文の量を判断すると思われる。どこまでを「同じ分野」と考えるかは、個人によって異なるが、いわゆる「国語学」といわれるような、日本語研究全体を一つの分野と考えた人が多かったのではなかろうか。

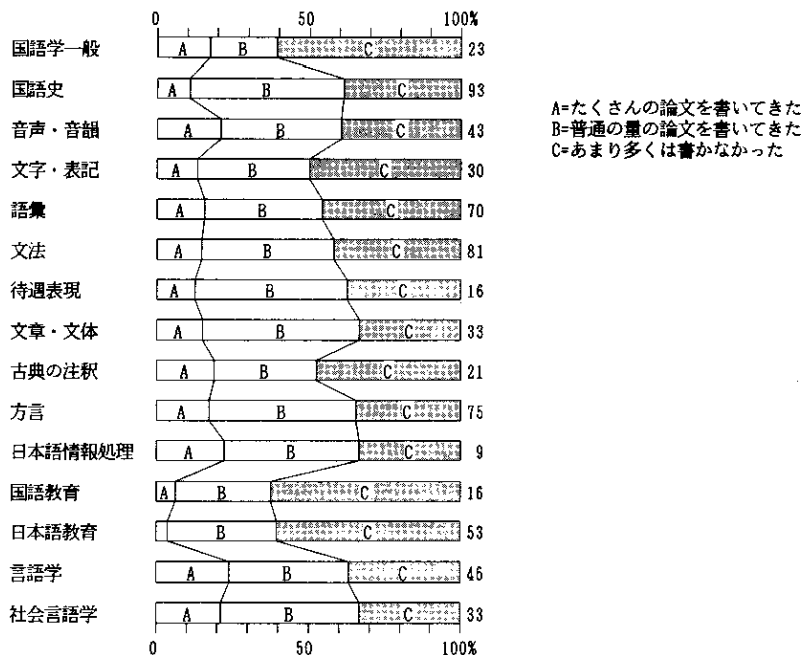


図18 書いた論文の量(専門分野別)

図18は、専門分野別に第2の質問を集計した結果である。「国語学一般・国語教育・日本語教育」では、C「あまり多くは書かなかった」が多い。これらの分野は、研究というよりも教育の色彩が強い分野である。図18のように専門分野の差が出てくるということは、回答者の判断基準が、ここでいう「専門分野」よりは広いことの反映であろう。日本語研究以外の分野についても論文の量が多いとか少ないとかいう判断ができる人はそういないはずであるから、上述のように「国語学」の範囲で論文量の多少を判断したと考えるのが自然である。

さて、自分が書いてきた論文の質と量は相関するのだろうか。上述の二つの質問をクロス集計したのが表5である。

表5の数値を見ると、かなりの相関が認められる。ちなみにカイ自乗値を計算してみると、38.09になり、自由度4の場合、0.1%水準で有意差が認められる。たくさん書く人ほど、論文の質の自己評価が高いということである。

表5 論文の質の自己評価と論文量の関係
質評価

論文量	COUNT	1	2	3	TOTAL
1 Iかなり質 Iの高い論 I文を書い Iてきた	1	22	31	4	57
2 I普通の量 Iてきた	2	23	109	18	150
3 Iあまり多く I書いた	3	14	99	41	154
TOTAL		59	239	63	361
PERCENT		16.34	66.20	17.45	

もしも、論文の量と質が強く相関するものであり、40代半ばで研究の量的ピークがあるならば、40代半ばに研究の質的ピークがあってもよさそうなものなのに、そうはならない。これをどのように考えるべきだろうか。ここでは、仮に三つの解釈を書き留めておくが、これらのいずれが正しいのか、あるいは全部正しいのか、あるいは正解はまた別なのか、今のところよくわからない。

(1) 40代半ばの研究の量的ピークは、研究者集団全体を見たときに見られる現象であって、たとえば、30代くらいから研究論文を発表するようになるとか、50代くらいで研究以外の仕事をするとかいうことで、40代半ばの研究者の数が多いことの反映という面もある。したがって、それぞれの研究者個人単位に見るならば、必ずしも40代半ばに研究の量的ピークがあるわけではない。

(2) 論文の量と質の相関が有意に高いといっても、きわめて強い相関であるとはたいていえず、したがって、研究の量的ピークが質的ピークに反映するほどのことはない。

(3) 自己評価の性格上、質の評価は自分のベストの時期（40代半ば？）を基準にして行なわれ、それはその後もあまり変わらない。

5. 研究状況の年齢的变化

研究の状況は、年齢によってどのように変わっていくものだろうか。論文の質や量を考える場合、研究状況の年齢的变化もとらえておき、それとの関連を考慮しなければならない。

5-1 専門分野の変化

あなたは、時間がたつにつれて専門とする分野が変わってきましたか。

図19は、年齢層別に変化を見たものであるが、25-29歳が変わっていないのは当然として、年齢が高くなるにつれてB「変わってきた」の比率が高くなるわけではないことに注目したい。70代以上は専門が変わっていない人がかなり多く、戦前あたりの学問的伝統をうかがわせる。50代・60代も、それと似た傾向があるのだろう。40代はB「変わってきた」の回答が最も多く、時代とともに専門を変えていく現代の傾向を最もよく反映していると見るべきである。

図20は、専門分野ごとに専門が変化したかどうかを見たものである。社会言

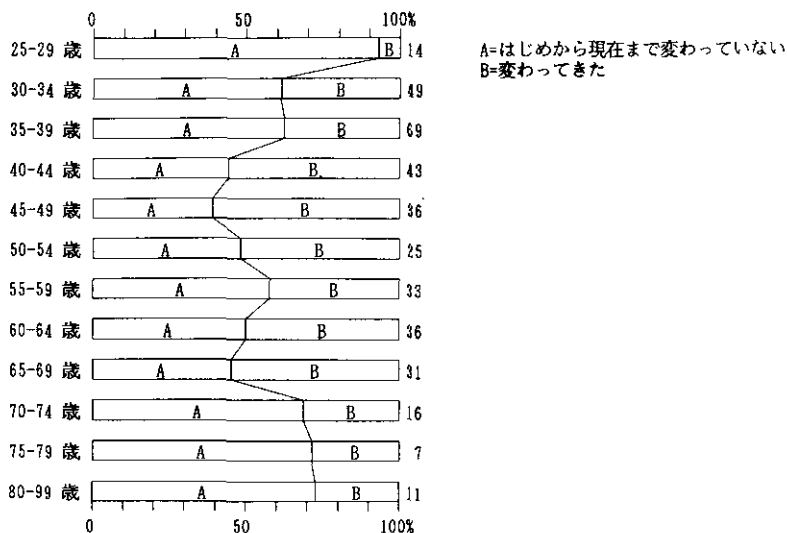


図19 専門分野の変化(年齢層別)

語学・待遇表現・日本語情報処理などは専門が変わってきたという回答が多く、ずっと以前からこの分野を研究してきたというよりは、最近研究するようになった人が多いということであろう。

(「専門分野が変わってきた」を回答した人に対して) あなたの専門分野はいつごろ変わりましたか。

図21は、回答を年齢層ごとに見たものである。図の左側に並んでいる年齢が回答者の現在の年齢であり、帯グラフで示されている年齢が回答した(専門分野が変わったときの)年齢である。各年齢層ごとに、自分の年齢までのいろいろな時期に専門分野が変わったと回答している。すなわち、専門分野が変わるという現象は、特に何歳くらいに起こりやすいということではなく、いつでも変われば変わるものだという事である。

あなたは、時間がたつにつれて専門とする分野の範囲が広がったり狭まったりしてきましたか。

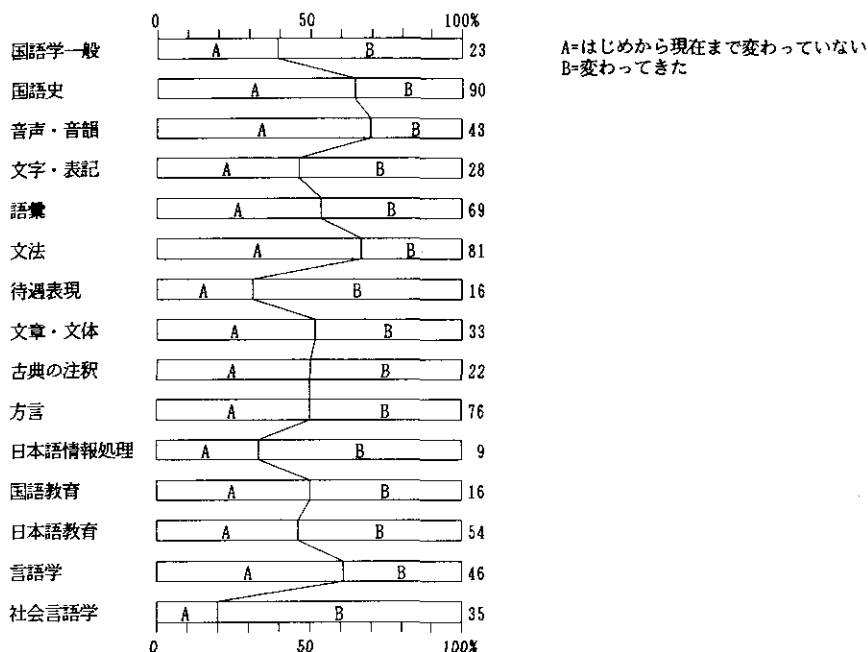


図20 専門分野の変化（専門分野別）

図22は、年齢層別の集計結果である。25-29歳の人は、変わっていない人が6割をしめるのは肯ける。80-99歳の人も同様であるが、これは図20と同様の傾向であろう。A「変わっていない」とC「狭まってきた」は60代・70代でやや多くなる。

（上で「変わっていない」以外を回答した人に対して）あなたの専門分野の範囲はいつごろ広がったり狭まったりしましたか。

何歳のときに狭くなったかを調べようとしても、「狭まってきた」という回答が少なかったため、ほとんど意味がなかった。

広がった時期については、年齢差や専門分野の差が見られた。

図23は、年齢層による違いであるが、図21とよく似た形になっている。専門が変わるということと広がるということは似た現象であるといえよう。

図24は、専門分野による違いであるが、「国語史・古典の注釈・国語教育」

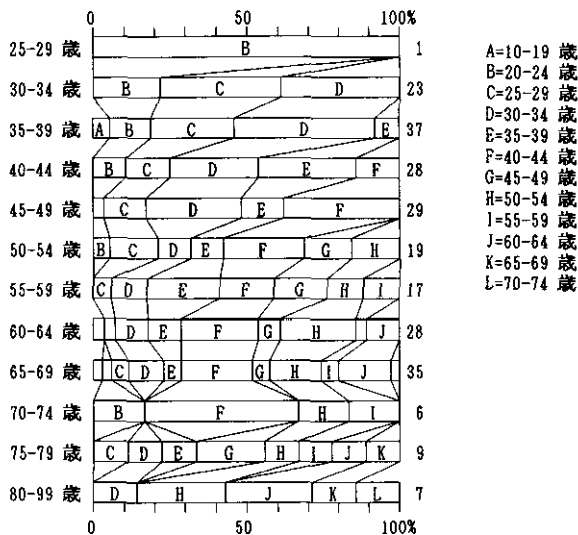


図21 専門分野が変化した年齢（年齢層別）

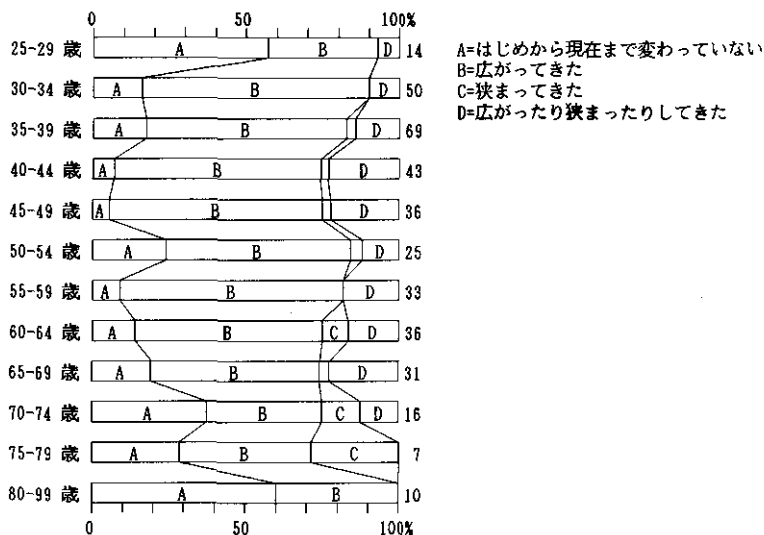


図22 専門の範囲の広狭の変化（年齢層別）

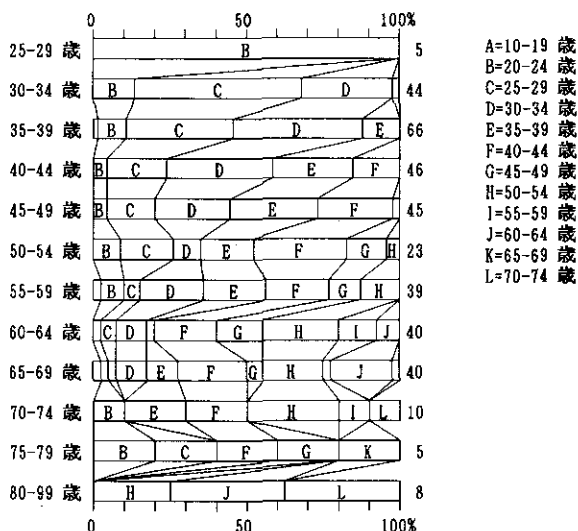


図23 専門の範囲の広がったときの年齢 (年齢層別)

は専門が広がった年齢というのが比較的高いのに対し、「日本語情報処理」は比較的低い。図3の、専門分野と年齢の関係と類似している。

5-2 論文の質の変化

あなたが書く論文の「質」はよくなりましたか、下がってきましたか。

図25に年齢層別の結果を示した。C～Dの中庸的な回答がどの年齢層でも最も多くなっている。A～Bのだんだんよくなるという回答もかなり見られるが、特に若い人で目立つ。質が下がってきたという回答がごく少ないことから、やはり、全体として、年齢が高くなるにつれて書く論文の質も高くなる傾向があるといえよう。

この結果は、代表的な論文をいつ書いたかという結果(図6)とやや食い違う。両者を関連させて考えれば、年齢が高くなるにつれて、次第に(平均的には)論文の質はよくなっていくものだが、自分が本当にいいと考えるようなトップクラスの論文は、必ずしも高年齢になってから書くというものではないということであろう。

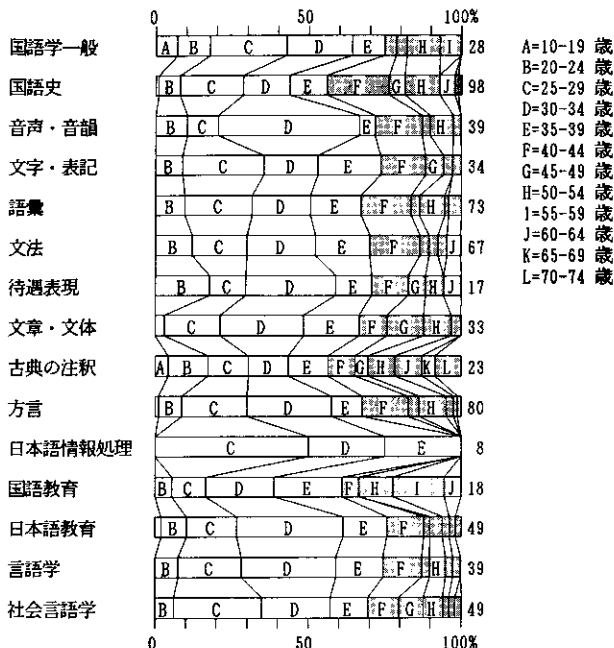


図24 専門の範囲の広がったときの年齢（専門分野別）

5-3 年齢別論文数の変化

あなたは今まで何本の論文を書いてきましたか、正確な数がわからない場合は、概数でもけっこうです。

非常に乱暴であるが、5歳ごとの年齢層に区分して、それぞれの回答の平均を求めることにした。ただし、100本以上という回答については、100本として計算した。ある個人がとび抜けて論文の本数が多いときに、その年齢層の数値がゆがむことを避けるためである。そのような回答者はごく少数だったので、年齢層ごとの平均値はおおよそのところの数値になっているはずである。結果は、表6のようになった。

ただし、このような発表媒体の区分が正確に（回答者全員が一致して）行なわれたかという点、あまり正確さは期待できないし、記入時に、そもそも回答

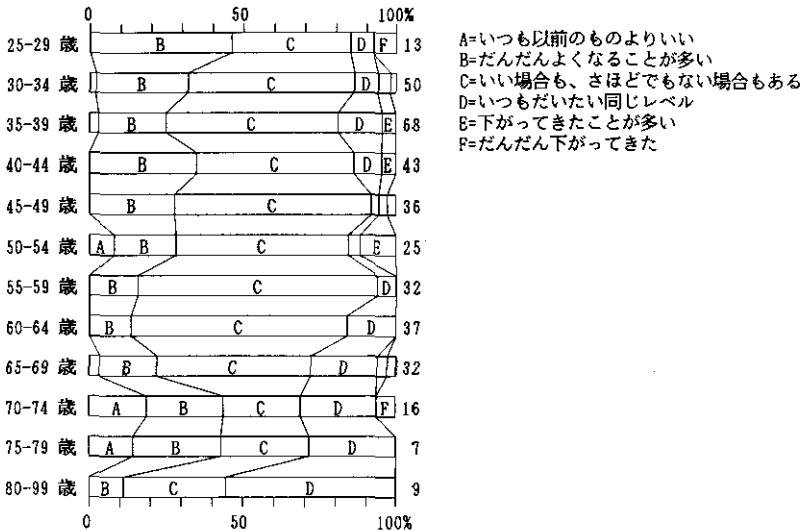


図25 論文の質の変化(年齢層別)

表6 年齢層ごとの雑誌論文の本数の平均

	学会誌 論文	国際雑 誌論文	商業雑 誌論文	大学紀 要論文	その他 の論文	国際会 議発表	著書・ 単行本	その他
25-29 歳	1.57	0.00	0.14	1.79	1.07	0.00	0.00	0.43
30-34 歳	2.32	0.14	0.58	3.86	3.04	0.28	0.48	1.42
35-39 歳	4.45	0.19	1.51	5.25	5.49	0.39	0.59	2.62
40-44 歳	4.21	0.46	2.95	9.35	7.12	0.49	1.84	1.56
45-49 歳	7.47	0.47	4.83	5.50	8.19	1.08	1.42	3.14
50-54 歳	9.32	0.92	11.40	12.08	17.64	1.04	4.84	8.24
55-59 歳	12.41	0.26	10.62	17.00	13.71	0.38	7.35	6.38
60-64 歳	14.16	0.81	7.03	12.16	5.89	1.27	5.43	2.84
65-69 歳	20.00	0.37	14.09	13.03	12.13	0.22	7.53	9.34
70-74 歳	20.81	0.19	20.87	8.37	13.87	0.31	6.06	6.81
75-79 歳	36.14	1.86	19.29	12.00	23.86	2.29	19.29	5.43
80-99 歳	11.27	1.82	9.64	2.91	6.91	0.55	4.64	0.09

は「概数」だったということもあって、この数値はあまり信頼できるものではない。

しかし、おおまかな傾向は読み取ることができる。論文の数は、年齢が高くなるにつれて、多くなっていて当然である。学会誌論文と商業雑誌論文は、その点で似た傾向を示す。しかし、国際雑誌論文・国際会議発表はまったく違っており、順調に増えていく性格のものではない。また、大学紀要論文は、60代以降は本数があまり伸びておらず、この年齢になると紀要には書かない傾向があることがわかる。なお、「その他の論文」の本数がずいぶんある。論文集や講座ものなどが入ってくると思われるが、この数値がかなり大きいのは、この項目で論文を5分類したことが（書いた論文を網羅していないという意味で）あまり適切ではなかったことを物語っている。

5-4 研究活動の年齢差

あなたは、国語学会の大会（春・秋で年2回）に出席しましたか。過去5年を目安にしてください。入会してから5年未満の人は、入会以後の年齢を目安にしてください。

図26は年齢層別の結果である。どの年齢層にも出席する人としていない人がいる。高年齢の人に欠席が多い傾向が見られるが、それが顕著になるのは80代以降である。したがって、学会に参加するかどうかということの年齢差はない。

図27は専門分野別の結果である。出席率が高い分野は「社会言語学」と「方言」である。「国語史」や「文字・表記」などの出席率も高い。一方、「古典の注釈」や「国語教育」は出席率が低い。

個人の研究活動として見た場合、学会に参加するタイプとそうでないタイプがあるといってよさそうだ。学会の参加率に年齢差がないことから、学会に参加するかどうかということと、研究をするか（論文を書くか）どうかということもあまり相関しないと推定できよう。

あなたは、研究活動と、教育・大学運営など他の活動のどちらに力をそいでいますか。

図28に年齢層別の結果を示した。A「研究活動」と回答した人の割合を見る

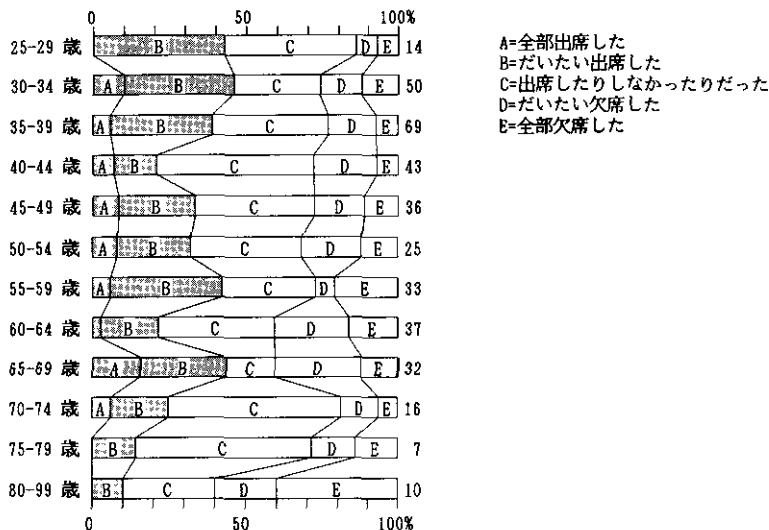


図26 国語学会の出席状況（年齢層別）

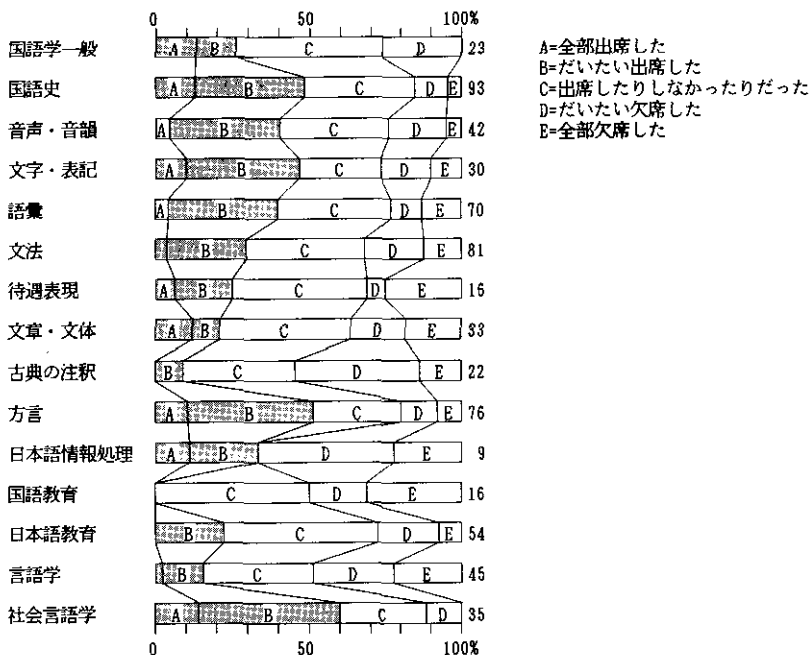


図27 国語学会の出席状況（専門分野別）

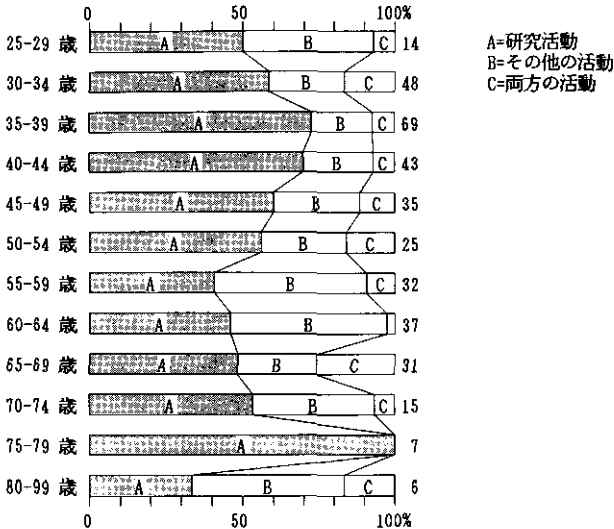


図28 活動の中心 (年齢層別)

と、30代後半から40代前半くらいが高い。研究に意欲があり、また現実的にできる条件があるということだろう。これは、研究の発表のピークが40代半ばにあることとよく符合する結果である。

もちろん、「力をそそぐ」といっても、自ら進んでそのような活動を行っているだけではなく、「力をそそがされる」(研究以外のことをやらされる)「力をそそがなければならない」というケースも多いことが予想される。

図29は、専門分野別の集計結果であるが、「国語教育・日本語教育」はA「研究活動」と回答する人の比率が低く、この分野は研究センターではないことがうかがえる。図18の論文量の図とも関連していると見られる。また、「待遇表現」でも研究センターの人の割合が低い。この分野でも、一般向けの啓蒙活動などが多い(あるいはそのようなことを行っている人が自分の専門分野を「待遇表現」と回答した)のだろう。

6. 自己評価の妥当性

今回のアンケートでは、自分の論文に対する自己評価を基準にしてながめてきたわけだが、このような自己評価がはたしてどのくらい信頼でき、どれだけ

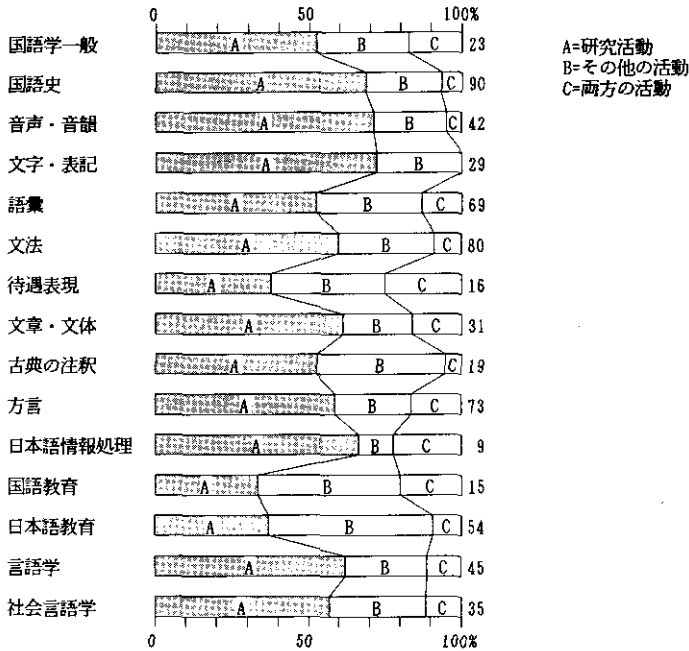


図29 活動の中心（専門分野別）

有効なのか、本当にできるのかという問題も考慮しなければならない。アンケートでは、これについてもたずねている。

6-1 自己評価の難易

論文の自己評価はむずかしいですか、むずかしくないですか。

図30は、年齢層別の集計結果である。

4 択式でたずねたところ、A+Bの比率とC+Dの比率がほぼ同じくらいになった。年齢差は見られない。自己評価がむずかしいかむずかしくないかで意見が分かれる結果になった。70-74歳でややC「あまりむずかしくない」が多いようだが、回答者が少ないための誤差であろう。

図31は、同じく専門分野別の集計結果である。

分野別には若干の差が認められる。待遇表現や国語教育では、自己評価がむ

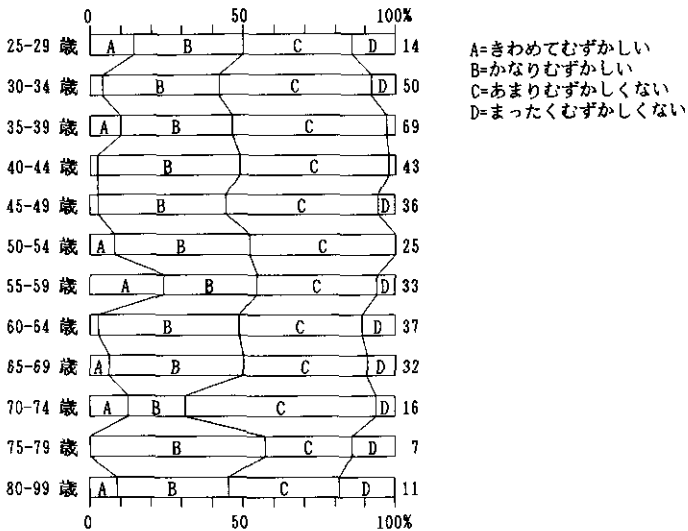


図30 自己評価の難易（年齢層別）

ずかしいようである。推察するに、研究の立場や方法がかなり異なった研究がいろいろあるためではなかろうか。一方、「国語学一般」・「古典の注釈」・「日本語情報処理」などは自己評価が比較的やさしいようである。前2者は、長年の蓄積で書くような面があるし、「日本語情報処理」は工学系と重なる領域で、実験などで研究の評価が客観的に示されるような面があるからであろう。

（自己評価がむずかしいと回答した人に対して）なぜ自己評価がむずかしいのでしょうか。

年齢差も専門分野差も見えないので、単純集計の結果（回答者の人数）だけを示す。

- 1) 自分の研究分野が変わってきたから=7人
- 2) 自分の研究方法が変わってきたから=14
- 3) 研究の中の重点のおき方が変わってきたから=52
- 4) 専門分野の研究者が多く、研究の進展が激しいから=38
- 5) 同じような研究関心を持つ人が少ないから=64
- 6) 発表当時と今では研究状況が変わったから=42

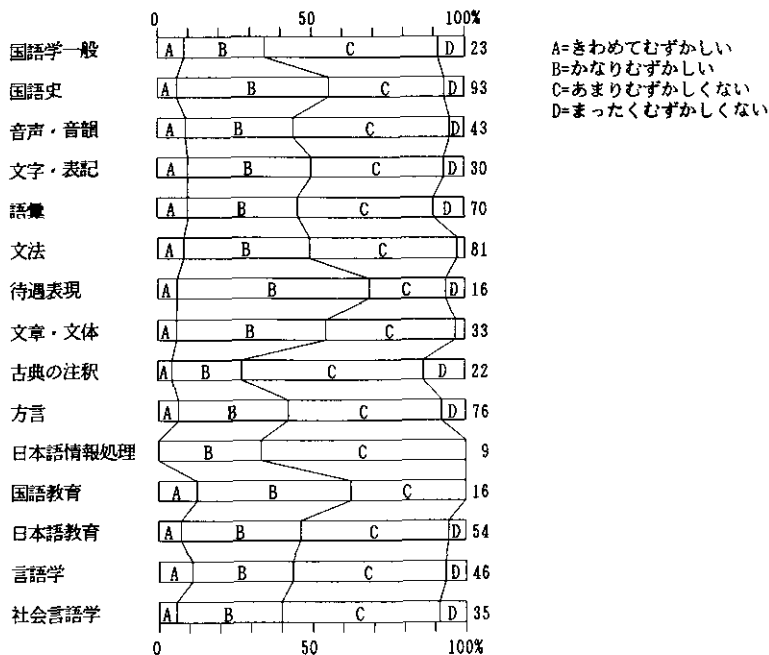


図31 自己評価の難易(専門分野別)

- 7) 他人の論文との関係を把握することがむずかしいから=60
- 8) 自分のことを自分で判断することはそもそもできないから=58
- 9) その他=46

以下に、「その他」の具体的な記述を示す。記述内容の最後のかっこの中の数字は、同様の回答をした人数を示す。

〈a〉研究に対する見方のむずかしさ

- ・自分自身の研究に対する考え方や論文に対する姿勢が変化してきているから。(5)
- ・従来書いたものをその後不十分であると思い、それを踏み台にしてより深く、論点を明確にした論旨を述べたいから。(3)
- ・扱っている事象、扱い方、見えている(つもり)の範囲などにより広い観点からの位置付け、見直しなどを自分だけで十分にやることは至難である。(2)
- ・研究分野自体が新しく、先行研究で直接参考にできるものが限られているた

め。

- ・学説、理論史の流れの中でどこに自分を位置付けられるかが明確になりにくい。
- ・レベルは高そうに見えるがわかりにくい論文と、レベルはさほど高くないが十分に理解でき、かつ新しい概念を与えてくれる論文のどちらの質が高いといえるのかわからないから。
- ・ほかの人の論文との優劣の比較や、研究史上の位置づけがむずかしい。
- ・自己評価も他者評価も、論文の目的やテーマによって異なるから。
- ・自分の研究分野についてどこまでわかっていることなのか(格理論など)、十分に把握しているかどうか不明な場合があるから。
- ・学習の広がりに対し、論文で取り扱える内容の経験が狭い。

〈b〉自分の評価能力の問題

- ・自分の知識、考えがまだ不十分なため。
- ・自分の本職が国語学、日本語研究ではないので、自己評価に関連する情報が十分ではないと思うから。
- ・自分は論文の執筆の速度が普通よりも遅いと思うので、その外見と内面的に関係して、完成したばかりの自分の論文に対する評価が厳しい。
- ・研究職を長期にわたって離れなくてはならない時期があったから。

〈c〉自分と他人の評価の関係

- ・自分の主観が入っていると考えられるので。(2)
- ・他人の書いたものを真に理解すること自体が難しい。
- ・自分は良いと思って他人がそれほど評価してくれないことは、それなりの理由があると思われて心配だから。
- ・問題意識を異にする他人から見ての価値は十分には判断できない。
- ・こちらがくだらない論文だと思っても、本人はそう思っていない場合がある。
- ・優れた論文は著者が予想する以上の影響力をもつことがあるから、低めに評価しがちである。

〈d〉時間が必要

- ・論文の評価は、ある程度の時間と他人からの評価にさらされた後に決まるから。(3)

- ・時間を置かないとわからないものだと思う。(2)
- ・執筆時には納得のいくものを書いたつもりでも、数年たって読み返すと、どうしても補いをしたくなってしまうため。(2)
- ・論文の評価は、50年後あるいは100年後に残るかどうかということや、当該の研究分野にどのくらい貢献しえたかと評価されるかによって決まるものなので、当人の評価できることではない。

〈e〉その他

- ・論文を書くための試行錯誤について、それを肯定的に評価したという気持ちと、論文にしたときに完成品としてのまずさを認めざるを得ないという否定的な気持ちが存在するから。(2)
- ・研究を始めた頃は、手軽な録音機もパソコンも近年のような音声機器もなかった。
- ・研究者の立場から書いたものは、研究者の立場の人々から見ると論文とは言えないようだ。
- ・柴田武、徳川宗賢、馬瀬良雄によれば、私が方言地理学の方法を日本に移植したそうだが。しかし柳田と小林を忘れてはいけない。一方、この分野の教え子が多いことはありがたい。
- ・一般的に言って、論文の評価が難しい場合があるという意味であって、自分の論文だから評価が難しいという意味ではない。

以上の結果をみると、自己の論文の評価はむずかしいとも、むずかしくないともいえそうである。

6-2 自己評価の変化

論文の自己評価が年齢によって変わっていくものであるとしたら、このようなアンケートによるある時点での自己の全論文に対する評価では安定した資料にならず、論文の質に関する議論はできない。これについても、アンケートでたずねている。

自分の論文に対する自己評価は、変わるものなののでしょうか、それともある程度変わらないものなののでしょうか。

自分の論文に対する自己評価が変わる場合という、論文執筆後数年たって研究の状況が変わったり、他人から厳しい批判が出たりして、自己評価が下がったとか、掲載当初は自信がなかったものの、あとでいろいろな人から高い評価を聞き、自信がついたなどが考えられます。

あなたの場合はどう思いますか。

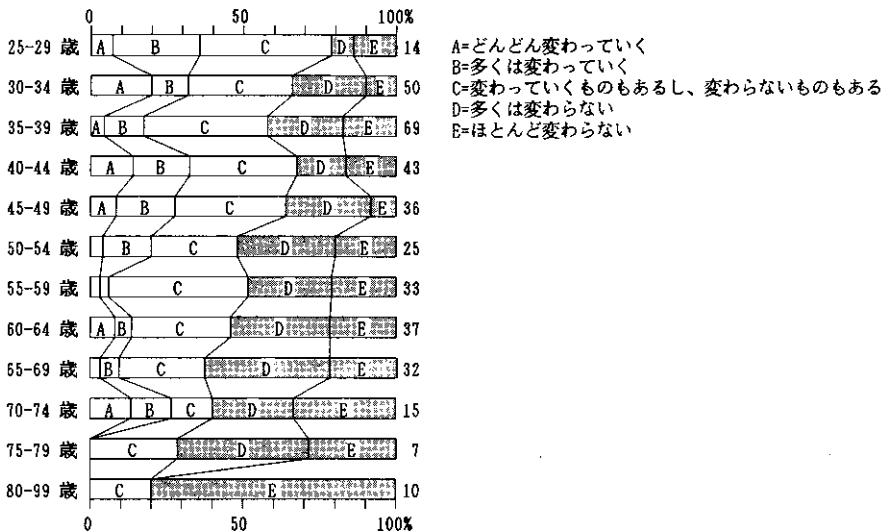


図32 自己評価の変化（年齢層別）

図32に年齢層別の結果を示した。変わらないという回答は高年層ほど多くなっている。このことは、自己評価というものがどちらかというと固定的なものだということをあらわしている。

専門分野別の図は省略するが、「古典の注釈」では、変わらないという回答が多い。

「自己評価が変わる」と回答した人に対して) 自分の論文に対する自己評価が変わる場合、高いほうに変わることが多いですか、低いほうに変わることが多いですか。

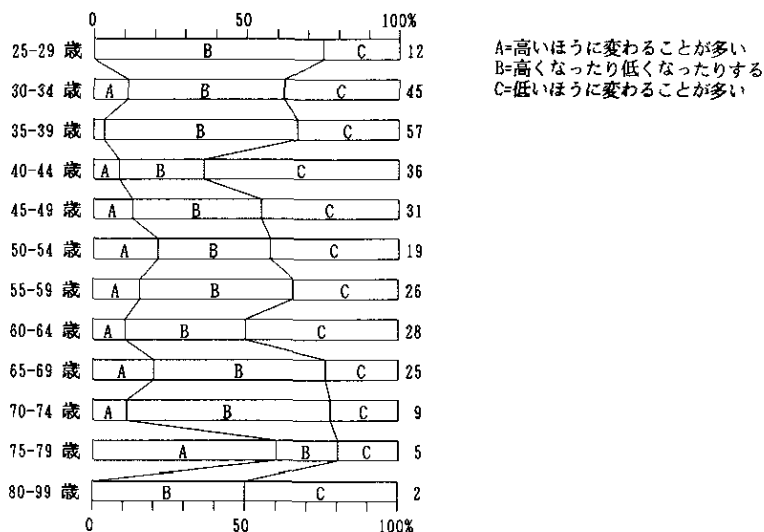


図33 自己評価の変化の方向 (年齢層別)

図33に年齢層別の結果を示した。A「高いほうに変わることが多い」はあまりなく、C「低いほうに変わることが多い」がかなり多い。40-44歳でC「低いほうに変わることが多い」がピークになる。若いときに書いた論文の欠点が見えてくるのが40代あたりといったところだろうか。

6-3 自己評価と他人からの評価の一致

論文の評価について、自分と他人でまったく食い違った評価をするものであるとしたら、これまた、このようなアンケートの結果は信頼できない。これについても、アンケートでたずねている。

論文の自己評価と他人からの評価は一致するものでしょうか、一致しないものでしょうか。

全員の回答分布を見ると、66.2%の人が、3) 一致したりしなかったりを選んでいる。4) 5) の一致しないというよりも2) 1) の一致するほうが多いということから考えて、3) の回答をした場合でも、自己評価と他人の評価の一致の程度は半分以上ではなかろうか。自己評価と他人からの評価はかなり一致するものであるといえよう。

この項目は、年齢差はあまりないが、専門分野による差が見られる。図34である。

自他の評価が一致するのは、「日本語情報処理」や「文字・表記」である。日本語情報処理は、回答者の人数が少ないので、あまりはっきりしたことはないが、この分野は、客観性を重視するため、評価が一致することが多いの

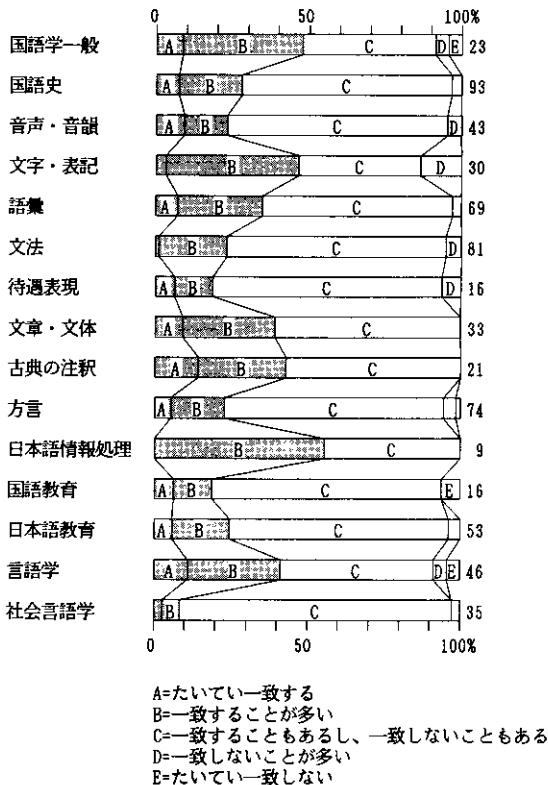


図34 自分と他人の評価の一致（専門分野別）

だろう。自他の評価が一致しないのは「社会言語学」である。この分野では、相当に違った立場が複数存在するのであろう。

（「自分と他人の評価が一致しない」を回答した人に対して）どのように
ずれることが多いですか。

年齢差も、専門分野差も見えないので、単純集計だけ示す。

- 1) 他人の評価よりも自己評価のほうが高いことが多い=34
- 2) 自己評価よりも他人の評価のほうが高いことが多い。=26
- 3) 他人の評価が高かったり、自己評価のほうが高かったり、両方ある。=217

6-4 論文の質を自己評価することについてのまとめ

以上の各項目ごとの結果から判断する限り、論文の質の自己評価は、そう簡単なものではなく、他人の評価と一致しないことがある。しかし、まったく無意味だというほどでもなく、なにがしかの傾向が把握できるという程度のことは言えよう。

ただし、自己評価は、自分自身の中ではあまり変化しないので、自己評価をたずねて論文の質を判定することはその意味での一応の信頼性があると考えられる。

論文の質の評価については、自己評価はあくまで自己評価にすぎず、他人からの評価と関連させて総合的に見ていかなければ、十分ではないといえよう。

7. 結 論

荻野の以前の研究から明らかなように、書かれる論文を量的な側面から考えると、40代が研究活動の中心的な年齢層ということがいえるが、質的な側面から考えると、今回の調査のような「自己評価」でいうならば、必ずしも40代に優れた論文を書くということではない。

ただし、今回の研究では、「現時点での自己評価」を基準に置いた。したがって、良くも悪しくも、すべては、自己評価がどのような性格のものにあるかが結果を大きく左右する。いうまでもなく、現時点での自己評価を絶対視することはできない。若いときには全力投球をして一生懸命研究し、それなりに力いっ

ばいの論文を書いたけれども、後年になっていろいろな研究成果が蓄積されてくると、当時の研究がどうだったか疑問に思えることもあるだろう。そのような場合、若いときの研究を（当時の基準で）高く評価するべきか、（現在の基準で）低く評価するべきか。このようなことには考え方の個人差があるとともに、個人の中でも年齢差（年齢による変化）がありそうである。

8. 今後の政策に関して

「研究の研究」からちょっと離れて、この調査の結果に関連する「政策的」な問題について述べたい。

第1の点は、若手研究者の重視ということである。今回の調査結果では、日本語研究者の一生に渡る研究活動を見たときに質的な面でピークが出てこなかったが、4-1の最後で書いたように、従来の研究成果をまとめて著書を書くような例を考えると、若いときの研究活動は、今回の結果以上に重視されなければならない。かなりの高齢になってからでも、自分の若いときの論文を高く評価していることがあるということも事実である。20~30代の若手研究者がもっともっと研究できるような体制にしたい。これは、次世代の研究者の養成とも直結する問題である。

第2の点は、研究環境の改善という点である。よりよい研究環境があれば、もっと研究が進展するだろう。個人的努力でよりよい研究環境を作ることも重要であるが、日本語研究全体を見通すならば、研究者集団として学会がその方向に努力することも重要ではないか。

9. 今後の研究課題

「自己評価」とは別の観点ということで「他者による評価」も可能性がある。このようなことが可能かどうか、どのような意味があるかも含めて検討してみたい。

欧米をはじめ、諸外国の言語研究者にも同様のアンケートを行って、日本語研究だけでなく、言語研究全部について国際的な比較などもやってみたいテーマである。

さらには、言語研究以外の分野まで手を広げると、言語研究のありかたを考える上で大きな手がかりになるようにも思うが、このあたりは不可能な領域で

あろうか。

補注：この論文は、国語学会平成6年度春季大会（1994. 6）における荻野の口頭発表を増補・改訂したものである。

謝辞：この調査を企画・実施するにあたっては、徳川宗賢氏に多大な恩恵を受けた。アンケートの改訂や予備調査の実施などについて、何回にも渡る郵便の往復などを含め、始終コメントを頂戴し、大変励まされた。また、予備調査・本調査では、多くの日本語研究者〈国語学会会員〉・言語研究者〈日本言語学会会員〉のご協力を得た。ここに記して謝意を表する。

参考文献

- [1] 荻野綱男（1993. 6）「日本語研究者はいつ論文を書くか——『日本語研究文献目録・雑誌編』に見られる年齢構造——」国語学第173集, pp. 左15-28
- [2] 荻野綱男（1992. 12）「男性日本語研究者は女性より多くの論文を書くか——『日本語研究文献目録・雑誌編』に見られる男女別年齢別論文生産性——」日本語研究（東京都立大学）13号, pp. 14-26
- [3] 荻野綱男（1993. 9）「短信：女性研究者の子育ての負担について」国語学第174集, pp. 64-65
- [4] 国立国語研究所・国語学会共編（1989）『日本語研究文献目録 雑誌編』秀英出版

付録：自由記入欄の意見について

アンケートの最後に、「このようなアンケートに対して意見のある方は、以下の欄に適宜記入してください」ということばを添えておいた。多くの方がさまざまな意見を書いてきたので、ここにまとめておく。自由回答の意見の最後にかっこに入った数字が書いてあるのは、同様の趣旨の意見を書いた人の人数である。なお、荻野に対する質問などもあったので、荻野の考えを【】の中に入れて示した。

<a>研究環境や個人差について

- ・研究が進むか進まないかは、環境に大きく左右されると思う。
- ・論文を書くには、やはり体力も必要で、気力と共に充実していなければよいものではない。
- ・人によって、役職、体力、人生観など、外的な条件がいろいろあるのではないか。
- ・自分の経験から、経済的裏付けがないと、なかなか研究も進まないのではないだろうか。大学院生のときに、多数の論文を出す人がいるが、そのようなひとは経済的に恵まれているのでしょうか。
- ・回答者の未婚、既婚の別、子供のあるなし、職業の有無、職種、出身大学等もファクターになるのではないだろうか。

住んでいる地域との関連

- ・地方に住んでいると、文献も自費購入になるので、学会の旅費までまわらないのが実情である。(2)
- ・田舎にいてもどうしても研究する仲間同士の集まりが少なく、学問の進歩が少ないので、地方の関係の言語なり方言なりを研究せざるを得ない。しかし、それが地方にいる者の強みでもあると思う。
- ・地方に住んでいるもののハンディを考慮に入れて欲しい。
- ・「方言研究」とは別に「古文書解読」もやっているが、当地では古文書を解読できる人がほとんどいないので、これを捨てることはできず、「方言研究の時間が欲しい」という願望を常に抱いている毎日である。

<c>勤務先や職種との関連

- ・教育学部に職を持つ以上、学生の指導を十分行なうべき立場であると覚悟をしている。その中で少しでも先に進むことができたかと考えている。
- ・高校教師の場合、教育に比率が置かれてしまうので、どうしても研究の時間が取れにくいので、大学研究者などと同じものさしではかるには問題がある。
- ・私立から国立に転任した者や、都会から地方に転任したのものもある（それぞれ逆もある）わけで、そうした研究環境の変化の有無や様相も論文の執筆と大きく関わると思う。
- ・国研の人の論文が多いのは、書く場があることと、年鑑に必ず載ること。
- ・早大文学部の場合は、大学院の年1回の紀要にも順番があり、毎年書くスペースがない。それが論文の少ない原因の一つにもなるのでしょ。

- ・勤務先や職種の上で、不本意な境遇にある場合、つまりハングリーな状態にあることと、論文算出の多寡とは関係があると思う。
- ・日本語教育の現場は極めて多忙であり、長期休暇以外はほとんど研究をするゆとりがないのが現状である。

<d>女性の側の負担

- ・女性研究者の負担は子育てのみではなく、老親の看護なども女のほうに大きいのしかかることが多い。
- ・（女性研究者）現在子育ての負担が自分ひとりにかかっており、研究が思うように進まない。周囲に同じような境遇のものを一人も知らないので、混迷摸索をしている。
- ・1993年11月26日、学術審議会主催のシンポジウムで、女性研究者の研究状況に関するものがありました。

<e>教育との関連

- ・大学の教員は著述をせず講義の質を高めるために全力をそそぐべきだという訓戒を守ると、論文の質を維持するのは容易ではない。
 - ・研究と教育がそれほど大きな矛盾を起ささないのが本来の大学の姿であるはずだが、なかなかそうはいかない。これは大きな問題である。
 - ・論文、著書をほとんどまったく公にしなかったにもかかわらず、講義のレベルがとて高かった例もあるが、このアンケートではそこをどう汲み取るのでしょうか。
 - ・研究成果は論文の形に表われるものだけではない。教育現場での適用などがあるが、それはどう評価するのか。
- 【この研究は、研究の研究であって、教育の研究ではないと考えています。したがって、研究者の多面的な存在のうち、「研究」面に絞って調査をしようと考えました。】

<f>質の問題

- ・このアンケートの範囲では、じゅうぶんには質的観点とは思えない。
 - ・質を問題にするべきで、いくら書いてもたとえば有坂論文の一本にも及ばないということも多い。
 - ・質についてはかる尺度はどこに求めるのか。
- 【質をはかることはきわめてデリケートでむずかしい問題であると思います。「自己評価」は一つの指標に過ぎません。したがって、自分と他人を質的観点から比べて評価する（どちらが優れているか判断する）ことは、このアンケートでは行なっていません。あくまで自分の年齢的な変化などに重点をおいたものになっています。】

<g>調査すべき項目の提言

- ・ある程度個人の内面の問題にも触れ得る調査を目指してもらえるといいと思う。
- ・論文の「質」と「量」に加えて、視野の広狭の要素も加えるとよい。視野の広狭は「質」に入れにくく、はじめは「広く」なれば「浅く」なり、後に深めていくことになる。しかし、一つの分野を継続して研究している人に比べると「質」は落ちることになりが

ちだ。

- ・論文のネタの探し方、論文の執筆プロセス、研究発表の準備プロセス、討論や論争の際の心模様などといった、もっと質的な意識・実態調査はいかがでしょうか。
- ・論文として公表するのを決断する段階についての調査があればいいと思う。
- ・研究者が数ということをごだけ意識しているか。(現実には「量より質」ではなくて「質より量」という状況があるように思えるので。)
- ・自分の論文をどのようにして評価してもらうかについての調査があればいいと思う。
- ・自分の論文の中で、将来にわたって意味を持つと自己評価できる論文は何編かを問うことは意味がある。
- ・ある時期、期間に研究が進められなかった事情等の調査があると、もっとよい。男性の事情、女性の事情の差が出るので。
- ・「いつ就職して研究活動に専念するようになったか」については取り上げないのか。

<h>調査の問題点の指摘

- ・しきりに「論文」の語が用いられているが、荻野氏が「論文を」いかにdefineされているのかわからない。このようなアンケートでは「論文」の意味を示すべきでしょう。「論文」という語があまりに安っぽく安易に使われていると思うからです。【荻野の判断がやや安直でした。研究者間で「論文」とはなにか、意見の一致がないということに十分な配慮ができていませんでした。私の考えを示すこともできますが、しかし、その基準ではかるといことに不満を示す研究者もいるでしょう。何を自己評価するべきかもむずかしい問題です。】
- ・学術論文だけでなく、索引、国語辞典、資料集等の制作を対象から除外すること【どこまでを研究業績と見なすかについても、意見が一致しないようです。】
- ・「あまり質の高くない論文を書いた」がホンネの人と、「質の高い論文を書いた」がホンネの人とでは、その通りの正直な答えを書いて投函する確率に差が出てくると思う。だから、このアンケートで「国語学者は……」と一般化するのは危険である。(回収された答えが母集団を反映しない可能性のある質問)【アンケート一般の問題点につながります。アンケートでわかったことは、あくまでアンケートの範囲内のことです。】
- ・国語学者は自分に理解できない分野や自分にかかわりがない分野に対しては無視する傾向があるので「評価」に対しての項目の立て方は、もう少し考える必要があると思う。

<i>さまざまな提案

- ・言語研究の中でも、数量的(データ収集→整理)なものと、それ以外(理論的研究)では、研究活動のありかたが違うのではないか。
- ・私自身は「自著論文被引用文献目録」を作って自己評価のめやすにしている。自己の論文評価の客観的基準のようなものも考慮したらどうか。
- ・今後日本国内での日本語研究が発展して行くために、どのような研究方向が考えられるのか、あるいはご自身はどのような分野の研究を開拓する必要があると考えておられるのか、がわかると面白い。

- ・国際比較もできれば面白い。
- ・研究分野、領域を変えている人について、その方向を調べてみると面白いと思う。

<j>このような研究の評価および感想

—————プラスの意見—————

- ・研究結果に興味がある。(10)
- ・面白い。(6)
- ・意味のある研究だと思う。(4)
- ・自分の研究を振り返って、反省する。(3)
- ・自分自身の反省のためにも、結果をおおいに役立てたい。(2)
- ・自身の回顧と展望に役立った。
- ・いつも旧来の研究を打ち破る新しい視点を提出してくれ、刺激を受けている。
- ・このような研究の広がりをものあたりまで射程に入れておられるのか、今後の仕事が興味深い。
- ・研究の資料や材料になるのなら、今後とも進んで協力したい。
- ・研究者が社会的立場を問いただすという意味でも、日本でも「学界」を対象にした研究がもっとあってしかるべきだと思う。
- ・どのように結果が処理されるのか関心がある。
- ・研究の研究は、研究史および研究史観の形成に不可欠に違いないと思う。
- ・研究条件を改善し、論文の質の向上を図るためには、その実態を把握し、分析し、その問題点を明らかにしなければならない。その意味でこの研究を高く評価したい。
- ・この取り組みが、大学を取り巻く環境や本当の意味での研究者養成に役立つことを願う。
- ・このようなことに関心を持ち、データをとる研究者がいるということに、なんとなく励まされるような気がする。

—————マイナスの意見—————

- ・荻野さんのこの一連の発表は「国語学」に載せるようなものではないと思う。大学院生もそう考えている人がかなりいる。
- ・「国語学」173, 174の論文も、学会誌に載せるべきものではない。
- ・有益だと思うが、ゴシップ的な興味から行なわれていることがありはしないか。荻野さんのように優秀な人はもっと他にやることがあるのではないのでしょうか。
- ・いろいろ条件の異なる人を相手に、このようなアンケートを実施しても、果してどのような結論を引き出せるというのでしょうか。

<k>研究分野に関する意見

- ・国語学会の機関誌の定期購読者はすべて国語研究者であるわけではないので御承知願いたい。
- ・心理学が専攻なのでこのアンケートには適していないかもしれない。
- ・日本語関係に限る内容なので、自分の力を入れている分野とはずれており、答えにくかった。

【国語学会会員でも、必ずしも「国語学」を専門にする人ではないわけで、そのようなことを十分想定しなかったのは反省するべき点です。】

〈1〉アンケートの質問項目について

○全体について

- ・ 答え方がむずかしい。選択肢にあてはまらないものがある。(5)
- ・ 生年や出身地で人物を特定できてしまうので、アンケートの性格上、質問を工夫した方がよい。(3)
- ・ 最後の名前の記入欄は不要ではないか。
- ・ ○×式のため、選択肢が規範的に過ぎ、当てはまらない場合がしばしばです。このような答えの集積が、必ずしも正確な結果を生ぜしめないことを危惧します。

○(1) 専門分野について

- ・ {1}の分類に工夫が欲しい。分類基準によっていくつかのパターンに分けるのも一案ではないか。また、「訓点」「外国資料」などの項目も必要と思う。①研究活動の内容についても考慮していいのではないか。例、「方言などのフィールドワーク」「理論的研究」「国語史などの資料調査」など。②研究費の出所(公的研究費、勤務先研究費、私費……)。【アンケートで使用したものは、フロッピー版文献目録(つまりは国語年鑑)の分類をマイナーチェンジしたものです。完全な分類はとてできないものと思います。あくまで便宜的なものです。】
- ・ {2}専門分野が変わったのではなく、分野の名称の変化(位置付けの変化)という見方もある。

○(2) 論文の自己評価について

- ・ (2)の質問は、本音では回答しにくい面があると思われる。
- ・ {1}業績の欄に「わけ」と「注釈」を加えておく方がよい。
- ・ {1}論文の分類がわかりにくい。
- ・ {1}一般に業績目標を作成するとき、著書(単行本)と(単数)論文との区別はきわめてあいまいである。
- ・ {1}論文集に書いたものを論文に入れるのか、著書に入れるか迷う。

【これも分類の問題で、どうやってもうまくいきません。著書と論文の区別について、内容的基準を中心に荻野の考えを示します。著書というのは、その全体を著者が書いた(著者に権利や責任がある)ということですから、論文集に書いたものは論文であると思います。共著の著書というのも、私は、各執筆者が他人の書いた部分までを含めて権利と責任がある場合というのを考えております。ですから、少なくともお互いに読んで事前に調整・修正などをした場合でない、共著の著書ではないと思います。分担執筆の多くは、そのような段階を踏みませんから、共著の著書ではないと考えています。理念としてはこう割り切っても、事前に内容を検討し執筆分担を決めた場合など、いろいろなケースがあることもまた当然です。境界領域の判断はアンケート記入者に任せるし

ありません。】

- ・ (1) 国内の学会発表は重要ではないのか。
- 【学会発表は、小さな会での発表から全国大会までいろいろなレベルがあり、どこまで含めるか、判断の個人差が大きいし、きちんと記録を取っているかどうか、不安もあったので、今回は含めませんでした。】
- ・ (1) 講演、シンポジウムなんかは研究活動に入れないのですか。
- ・ (1) 著者の共単著別が必要。
- ・ (1) 商業雑誌の定義が困難である。
- ・ (7) は答えにくい。研究をあまりしなかった時は①病気療養中、②大学で学生紛争の時の委員やその他重い仕事についてた時で、それ以外はなるべく研究を続けてきたので、年齢とはあまり関係ないと思う。
- ・ (3)～(8)については、その人の性格や気質に関係するものと思われ、結果の評価上注意が必要だと思う。
- ・ (8) (9)の質問で、他人の評価が耳にはいってこない場合もあるのではないかな。

○ (3) 研究活動について

- ・ (3) の研究活動についての質問は、60歳を過ぎた者にとっては酷。
- ・ (1-2) 研究生活に入った時期が人によって遅速があるので、30代で何本、40代で何本というふうにしたほうがよい。
- ・ (2), (6)の「どんどん進む」「力をそそぐ」という文が多義的で答えづらかった。
- ・ (5) 学会活動の参加については、国語学会に限定する必要性をさして感じない。国語学会の現時点での発表の「質」からはそちらにあまり魅力を感じない。
- ・ (5) 所属学会の欄には、言語学会以外の記入欄があればいいと思う。
- ・ (6) 「力をそそいでいる」という質問では主体的になる。
- ・ (6) 「研究活動」と、「教育、大学運営など他の活動」に二分されているが、研究と教育はお互いに影響を与えあっているので、分けがたいところがある。
- ・ (6) 本当は研究に力をそそぎたいのだが、それを許さない状況がある場合、どちらに○をつけてよいのかははっきりしない。
- ・ 「日本語教育に関係する研究者には研究時間が少ない」という仮説を立て、(1)の(1)と(3)の(6)の相関を調べれば、立証できそうな気がする。
- ・ (7) 力をそそいでいた期間というのは、もう研究が終わってしまったようで、不適切な問いかけである。
- ・ (7) 研究を始めた年というのは必要ないのでしょうか。【(3)の(7)の項目は、そのつもりでした。】

<■> その他の意見

- ・ 「自己評価」は第三者評価と無関係ではなく、また、何に生かすか、生かせるか、生かすべきではないか、など、これも難問だと思っています。
- ・ もっと若さのあるときに書いておけばよかったと思う。
- ・ いやな顔をする人もいる(?)かも知れませんが、頑張ってください。

- ・結果を公表するとき、母集団と調査達成率についても詳しく示して欲しい。
- ・NIFTYかInternet(JUNET)の電子メールでいただけると面倒がなくてありがたい。
- ・このようなアンケートに答える人のタイプが限定されてしまうので、分析は大変むずかしいと思う。
- ・学者は自分の業績を評価されることに対してデリケートである。
- ・答えるのがむずかしかった。
- ・自分はまだ若く、論文執筆数が少ないので、まともな回答になっていないと思う。
- ・国語の研究者に対する政策にも影響力がありそうだ。
- ・なかなか成果が上がらなかつたり、論文が書けなかつたりする時、どういう展望を持って研究に取り組むかがわかれば嬉しいと思う。
- ・自分が身を置いている理論言語学は、日本では研究基盤ができていない。
- ・(7)に関連して、言語研究の目的とその評価について、御自身の見解を表明して欲しい。
【荻野は、自分の興味のあることをなんでも研究する主義なので、言語研究の目的など考えたこともありません。】
- ・研究発表会で、アンケート用紙を配布し、その場で評価して優劣を競うような企画があっても面白いと思う。【他の(理科系中心的な)学会では、すでに実現しています。それによって学会賞、大会発表賞などを授与するわけです。国語学会でできるかどうか、荻野はわかりません。いろいろな暗躍があってよくないという意見もありますが、大会で発表する側・聞く側の両方に緊張をもたらして、どちらかといえば有意義だと思います。】
- ・現在は院生レベルの研究者が増えているので、それによって質の低下が見られる、というのは本当でしょうか。【荻野はそうは思いません。むしろ、院生レベルのほうがいい場合が多いのではないかとさえ思います。】
- ・客観的には大したことのない研究でも、本人は偉大な仕事だと信じているというタイプの研究者は、結構いるのではないだろうか。しかし、このうぬぼれが研究者には少しは必要であるともいえるが。